

# 戦争体験談記録集

戦争の教訓を後世に伝えていくことを目的として、平成27年度に戦争を体験された方々の体験を聞き取り、平成28年度にその戦争体験を記録集にまとめました。

八幡市



## 戦争体験談記録集

の発刊にあたって

戦後 70 年が経過し、私たちは、「戦争」を経験することなく、平和な社会を享受しています。

一方、世界に目を向けると、各地で紛争やテロが絶えることなく、罪のない人たちが犠牲になる悲劇が繰り返されています。

また、世界で唯一の被爆国である日本において、核兵器のない世界の実現は、全国民共通の願いですが、世界ではいまだに多くの核兵器が存在し、世界の平和と人類の生存に深刻な脅威を与え続けています。

本市では、昭和 57 年（1982）9 月に「八幡市非核平和都市宣言」を行い、戦争の悲惨さや平和の尊さを次世代に伝えるため、毎年、平和事業を実施しています。

戦後 70 年が経過し、戦争体験者の皆様も高齢となられ、直接お話しをうかがう機会は少なくなっています。そこで、過去の悲惨な戦争を体験された方々から頂いた体験談記録を冊子にまとめ発行することといたしました。

ぜひとも、戦争を知らない、次の世代を担う方々に読んでいただき、戦争の悲惨さ、平和の大切さを少しでも実感していただければと思います。

最後になりますが、体験談をお寄せいただいた皆様並びに検証・監修をいただきました京都府立大学教授 小林啓治氏、名城大学非常勤講師 久野潤氏に心からお礼を申し上げます。

平成 28 年 9 月

八幡市長

堀口文昭

## 目 次

① 戦時中の生活（田制良）	1
② 軍隊での生活（西川良壺）	6
③ 食料難と空襲（八木郷子）	11
④ 疎開と戦時中（増田清司）	13
⑤ 軍事訓練と召集令状（川村昭三）	17
⑥ 特攻志願（匿名）	23
⑦ 朝鮮からの引き揚げ（前川美智子）	26
⑧ 戦時中・戦後の思い出（高井哲雄）	36
⑨ 捕虜生活（渡邊實）	40
⑩ 国民学校時代（新湯博久）	48
⑪ 軍需工場（奥村みち子）	51
⑫ 終戦当時の思い出（東龍一）	54
⑬ 戦後の生活（岡本トシエ）	55
⑭ 戦時中の生活（南ヶ丘老人の家に来館されていた方々）	57
⑮ 監修：戦争の推移と民衆の生活（京都府立大学教授 小林啓治）	59
⑯ 監修：戦争体験談監修にあたって（名城大学非常勤講師 久野潤）	64
参考資料	65

## 戦時中の生活

田制 良（たせい よし）

大正 10 年（1921）7 月 29 日生まれ

八幡市八幡高坊在住

### 主人の転勤で八幡へ

私は、昭和 17 年（1942）に結婚し、東京市（現在の東京都）の荻窪に住んでいましたが、昭和 18 年（1943）4 月に主人の関西（大阪市）への転勤で当時の八幡町に住むことになりました。

第二次世界大戦の最中で大阪市内は本土空襲に備えて、疎開（敵の空襲などを避け安全な地域に一時的に移住）するように言われていたため、私の父の知人の縁で現在の八幡の家に住むことになりました。

以前の東京も物資はすべて配給制で、夫婦 2 人の家庭では、大根半分とか、白菜 1/4 玉、いわし 4 尾、時にはタラ（スケトウダラ）だったり、その日の配給を家族の人数で分け合い、ある物だけで食事を作るのに苦労しました。

防空訓練も強制的に各家庭から 1 名が参加し、在郷軍人（現役を離れた軍人）の号令のもと、バケツリレーや竹やりの訓練、竿の先に縄をハタキの様に取り付けた火たたきで、焼夷弾<sup>\*1</sup>が落ちたら、これで叩き消せというような訓練もさせられました。

昭和 18 年（1943）に八幡に来てからは、大阪は工場の排煙など大気汚染が酷（ひど）く、主人が大阪から帰宅すると、「八幡の空気は美味しい」と、よく言っていました。

昭和 19 年（1944）4 月からは、仙台に居た主人の母と妹を呼び寄せて、一緒に暮らすことになり、家族が 4 人になりました。

戦時下でもあり、食糧は配給制で町内の組長が配給先に行き、それを町内でわけるのでした。家族一日に一人あたり、お米は 2 合 6 勺（1 合は 180m 1 約 150 グラム）の配給でした。また、一握りの砂糖とお酒も 2 合ぐらいが、月に一度の配給でした。お酒の好きな人と砂糖を物々交換したり、衣料切符<sup>\*2</sup>でスフという布地が買えたり、洗濯石鹼は鯨油（クジラの油）で作った臭い石鹼で、新聞は朝刊が 1 枚（1 ページ）、夕刊は半ぺら（1 ページの半分）だけで、読んだ後はトイレットペーパーになりました。

配給だけでは、とても足りなくて嫁入りの時に作ってもらった仕付け糸のついた新しい着物も次々に米や芋に代えて食いつないできました。

田んぼのタニシや野ゼリ、ノビル<sup>※3</sup>、イナゴ、芋づるなど、家の周囲にあるものも採ってきて食料として食べました。

当時は、水道はなくて、八幡（はちまん）さんの地下からの湧水を炭やシュロでろ過して使っていましたが、夏場は水が枯れて、駅前の井戸がある家に水をわけてもらっていました。バケツ 2 杯分をわけてもらい、石段を登って帰るのですが、いつも、半分ぐらいになっていました。

わけてもらった水は、大きな水瓶に溜めて使っていました。

水道ができたのは戦後、昭和 24 年（1949）ぐらいでした。ガスは朝日屋<sup>※4</sup>さんの前まではきていましたが、私の家までは通ってなく、薪や落ち葉などを燃やしてお風呂を沸かしていました。私の家は、かやぶき屋根でしたので、風が強い日は屋根に火の粉が飛ばないか、常に様子を見ながら少しずつ燃やして風呂を沸かしていました。このままでは、危険なのでガスを引き込み、ガス風呂に交換しました。物珍しいのか近所の人たちが、ガス風呂はどんなものなのか見に来られたことを覚えています。今から思えば、山の中の仙人のような生活をしていました。

高坊地区の防空壕は、今の男山ケーブル西側の山際に掘りましたが、2～3 人しか入れないような小さいものでした。そのため、当時はどこに逃げようかなんて思っていました。モンペ<sup>※5</sup>を履いて防空頭巾<sup>※6</sup>と肩から下げる袋（貴重品入れ）は、常にそばに置き、逃げる用意もしていました。高坊隣組<sup>※7</sup>は 3 班あり、夜の警戒警報とか空襲警報<sup>※8</sup>が出た時は、皆に知らせるため、班から 1 人ずつ出て、当番の家に一晩中、寝ずに詰め、発令になったら町内を触れて回りました。



B29 爆撃機

その頃から本土も度々、空襲に見舞われました。アメリカ軍の B29 爆撃機<sup>※9</sup>が大阪を攻撃するために天王山と男山の間を通過する通り道となっていました。ある時、アメリカの戦闘機が搭乗員の人影が見えるほど低空で飛んで来て、御幸橋を渡っていた人が、機銃掃射でお腹を撃たれ、雨戸の戸板を担架代わりに乗せられて駅前の立本医院に担ぎ込まれたことがありました。

空襲警報が発令されると、夜は明かりが外に漏れないように、窓には厚い毛布や黒い布をカーテンにして、電燈は食卓の上 10 センチ位まで下げて黒い布で被っていました。食事の用意も薪を燃やして煙を出さないように警戒警報が出ない時に食事の用意をして薄暗い中で食事をしていました。

八幡のまちは、B29 爆撃機からの直接爆撃はありませんでしたが隣の枚方で

は、空爆がありました。昭和 20 年（1945）の大阪大空襲<sup>※10</sup>のとき、八幡の空に赤ねずみ色の不気味な煙が大阪からどんどん流れてきて、大阪の中之島に勤務していた主人が夜中の 0 時を過ぎても帰らず心配していたら、2 時過ぎに顔も服もススだらけになって帰ってきました。火の中を野江<sup>※11</sup>まで歩き何とか京阪電車に乗れたそうです。

当時の京阪電車は三条から天満橋までしかなく、男山のケーブルは、昭和 18 年（1943）まで動いていましたが、ケーブルカーは鉄製なので銃弾になるとか言われ、使用されず駅前に放置してありました。ケーブル運行の再開は、昭和 32 年ごろでした。駅舎は、今と異なり 2 階建てでした。

## 戦没者慰霊碑

日米開戦後の、昭和 17 年（1942）9 月に義弟（主人の弟）が早稲田大学を早期卒業させられ、仙台の軍隊に配属となりました<sup>※12</sup>。義弟から、神戸の六甲道（ろっこうみち）の宿屋に面会に来てくれとの内緒の電話があったので、なけなしのもち米や砂糖を使って、おはぎを作り持っていきました。自分では食わず、みんなに「おい食べろ、食べろ」と言ってみんなに配ったことがありました。

義弟の軍隊は、2,000 人ぐらいの規模で、その後フィリピン方面に輸送されたのですが、乗船していた船が途中で攻撃を受けて沈没し、2,000 人の内 3 人しか助かりませんでした。私の義弟は、その 3 人の内の一人でした。24 時間泳ぎっぱなしで、漂流していた板につかまっていたところを漁船に助けられ、フィリピンに上陸したそうです。しかし、昭和 20 年（1945）2 月 27 日にフィリピン、マスバテ島<sup>※13</sup>にて 27 歳の若さで戦死しました。遺骨はありませんでした。

終戦後の昭和 21 年（1946）3 月に戦死の公報が届き、その年の 10 月に八幡町で戦死された方々と一緒に町葬をしていただき、律寺（善法律寺）<sup>※14</sup>の境内に戦没者慰霊碑がありますが、そこに名前が刻まれています。

義兄（主人の兄）も昭和 18 年（1943）10 月に軍医として中支<sup>※15</sup>（中国の揚子江と黄河に挟まれた地域）に召集され、昭和 21 年（1946）6 月に母のいる八幡の実家に帰還しました。よれよれの軍服にゲートル（巻脚絆）<sup>※16</sup>、背中にはいのう<sup>※17</sup>（リュックサック）を背負い、毛布 1 枚と飯ごうとボコボコになった水筒をぶら下げただけで帰ってきたのでした。

みんなどんなに喜んだことか、年末まで休養してからは、京都市内（五条）に医院を開業しました。

## 終戦後の大変な生活

終戦後の生活は、苦しく、配給はよく滞りました。昭和 21 年（1946）3 月に

は、今までの預金も封鎖され、新円<sup>※18</sup>の使用になりました。食料もお米の代わりにナンバ（とうもろこし）の粉と大豆が配給されましたが、それらも欠配続きでどうにもならずヤミ市で買わざるを得なくなりました。

当時の日記によると給料を月 760 円もらっていましたが、白米 1 升（1 升は 1.8 リットル）70 円、小麦 1 升 65 円、さつま芋 1 貫（1 貫は 3.75 kg）30 円、醤油 1 升 6 円など、給料が全部食費で消え、日に日に値上げされ、上がらないのは給料のみでした。また、電力不足のため夕方 6 時から 30 分毎に 4 回停電したり、電車賃は 3 倍に値上げになったりで生活は大変でした。

それでも、空襲で焼け出された人たちのことを思うと八幡は大きな被害を受けずに済み、何かと大変でしたが幸せだったと思います。

.....

(※1) **焼夷弾** 物を破壊することを目的とした爆弾とは異なり、市街地を焼き払うために開発された爆弾。着地すると油脂が飛び散って火災をおこし、木造家屋の密集地では一気に燃え広がったため、逃げずに火を消せと指導されたことも相まって、多くの犠牲者が出た。

(※2) **衣料切符** 繊維製品の消費を配給制度によって統制するために発行された切符。

**スフ** 木材パルプから絹に似せて人工的に作られた（人造絹糸）繊維。この頃のもののは破れやすかった。

(※3) **ノビル** ヒガンバナ科のネギ亜科ネギ属の多年草、ネギのようにひりひりと辛い。

(※4) **朝日屋** 石清水八幡宮の麓、京阪八幡市駅前にある 100 年以上の歴史ある飲食店

(※5) **モンペ** 女性向けの労働用ズボン、ゆったりとした胴回りと足首の部分で絞った物

(※6) **防空頭巾** 空襲の時に落下物から首筋や顔を守る頭巾で、同時に頭髪を押さえ込み、頭髪が燃えるのを防ぐ。

(※7) **隣組** 総力戦体制を支え国民を統制するために、昭和 15 年（1940）内務省の訓令によって部落会・町内会の下に設けられ、配給・供出・動員などに関して行政機構の最末端組織となった。5~10 戸単位で構成される。高坊隣組とは八幡高坊地域にあったものと思われる。

(※8) **警戒警報・空襲警報** 昭和 12 年（1937）に防空法が公布され、その施行令で、航空機の来襲の「虞」（おそれ）がある場合に出されるのが警戒警報、航空機の「危険」がある場合に出されるのが空襲警報と規定された。通常は、まず警戒警報が出され、空襲の危険が切迫した場合に空襲警報が出された。

(※9) **B29 爆撃機** アメリカのボーイング社により開発・製造された大型長距離爆撃機。日本空襲の主力となり、広島・長崎への原爆投下も行った。朝鮮戦争でも使用された。

(※10) **大阪大空襲** 第二次世界大戦末期にアメリカ軍が繰り返し行った、大阪市を中心とする地域への戦略爆撃ないし無差別爆撃の総称である。



ノビル

(※11) **野江** 京阪電車 野江駅(京橋、関目間の駅。大阪市城東区成育三丁目)

(※12) 徴兵制は本籍地を基準にすべてが組み立てられていた。ここでは「仙台に居た主人の母と妹」とあるので、義弟も仙台が本籍地だったと考えられ、そのため仙台の軍隊に配属された。

(※13) **マスバテ島** フィリピン中部ビコル地方に属するマスバテ州の本土

(※14) **善法律寺** 馬場運動公園南隣の寺院 石清水八幡宮検校職であった善法寺宮清の建立。宝冠阿弥陀如来坐像をはじめ、僧形八幡坐像を安置する。また足利義満の母良子の菩提寺であった。境内には寄進された紅葉が多く、「紅葉寺」ともいわれる。



善法律寺(八幡馬場)

(※15) **中支(華中)** 中国の揚子江と黄河に挟まれた地域。戦前の日本では、同地域を中支、中支那などと呼んでいた。

(※16) **ゲートル** 一般には、ズボンの袖を押さえ障害物のからまりを防ぐ脚絆のことを指す。ここでは、脛を保護し疲労を軽減するために、日本軍が使用していた巻脚絆のことを意味する。巻脚絆は包帯状の小幅の長い布で、足首からひざ下まで脚を巻き上げて使用した。

(※17) **はいのう(背囊)** 皮や布で作った、背中に負う方形のかばん。軍人などが用いる。

(※18) **新円切替** 昭和 21(1946)年 2 月、幣原内閣は戦後インフレーション対策として金融緊急措置令などを公布し、従来の紙幣(旧円)を新たな日本銀行券(新円)に切り替えた。旧円は一定の限度額を設けて新円と交換し、流通が停止された。

## 軍隊での生活

西川良壺（にしかわ りょういち）

大正 15 年（1926）8 月 26 日生まれ

男山美桜在住

### 私が入隊するまで

私は、国民学校<sup>※1</sup>を卒業後（12 歳）に青年学校<sup>※2</sup>に入りました。そこでは軍事訓練が主で、今の馬場運動公園（八幡馬場）が訓練場でした。訓練の内容は、銃剣で人形に向けて突き刺したり、模擬手りゅう弾を投げるなどでした。

私が兵隊に行く前のことです。

八幡市内では、絶えず B29 が空襲に飛んできました、ある日、牛を使って田んぼを耕していると、今のイズミヤあたりに<sup>※3</sup>爆弾が落とされ、すごい土煙が上がりました。早速、見に行ったら直径 30m ぐらいあったか、それは深い穴があいて周囲の柿の木に太い大木が引っかかっていました。

また、ある時、両親と麦刈りをしていたら丸い鉄板の蓋が落ちていました、それは B29 の焼夷弾を投下するときの蓋らしく、それが丁度、ほうらく<sup>※4</sup>（物を炒るときに使う鍋）の代わりになり、つい最近まで使用できたほど丈夫な蓋でした。

### 陸軍に入隊

18 歳の時、1 日でも早く兵隊に行きたくて、少年戦車兵<sup>※5</sup>を志願し、伏見の 37 部隊（京都師団）で試験を受け、学科も身体検査も合格しましたが、志願者が多くて抽選で外れてしまいました。

私が 19 歳のときです。当時は 20 歳になると誰もが軍隊に召集される「現役」というのがあり、試験は受かっていたのですが、私は海軍飛行予科練習生（予科練）<sup>※6</sup>も志願しており、両方とも受かっていました。

合格通知が陸軍の方が早く、私は一日でも早く入隊したかったことから、昭和 20 年（1945）6 月 26 日に伏見の連隊に入隊しました。

そこでは、青年学校時代の訓練と違い、厳しい扱いを受けました。上官の意見は、間違ってもそれに従わなければなりません。入隊して 1 週間程経って、順番に炊事の当番が私に回ってきた時のことです。ごはんを入れる大きなバッグを提げて、食堂にごはんをもらいに行きました。トイレか何か記憶は定かではないですが、バッグを食堂に置いて、少しの間離れました。食

堂に戻ってきたときにはバッグは無くなっていました。これまでなら「バッグなくなりました」と先生に言えば、叱られるだけで許してもらえらるけど、入隊間もない新兵でも軍隊はそういうわけにはいきません。

その時に青年学校の先輩の田町（志水の一部の旧地名）の森本さんが先に入隊されていて、古参でした。「ちょっと待ってくれよ」と言って、探してきてくれました。実は、他の置いてあったバッグをあべこべに盗ってきてくれたのでした。私は、それで助かったことを今でも忘れることができません。

もう一つのエピソードは、軍隊に入って班が決められ、何連隊の何中隊の何班かは、今はもう忘れましたが、整列している時に、5つか6つ離れた班の中に、私の小学校5年生に習った担任の先生がおられました。その先生には特に良くしてもらっていて、心安かったのです。というのも、当時はイ組からニ組まであって、ニ組の女の先生が、その先生が好きだったみたいで、今でいう恋愛でした。当時は子どもで何もわからなかったのですが、後で恋愛だと思いました。女の先生は、私に、帰りに「先生に、これ渡しといて」とかよく頼みました。便所の裏で2人が話されていたのを見ても、子どもだったので当時は何もわかりませんでした。その先生が同じ日に入隊されていました。私ら新兵とは違い、腕章には金の筋が1本入っており、伍長の階級でした。中隊長の次ぐらいに偉い人だったと思います。

「先生と違いますか」と私が言うと、先生は「おお、お前も兵隊に来たのか。わしもたまらんわ」なんて言われました。

先生から、兵隊なのに頭をなでてもらい、「お前には世話になったなあ」と言っておられたことを覚えています。

7月2日に私たちは、上賀茂小学校に移動し、上賀茂神社の境内で2～3日訓練した後、7月4日か5日に京都駅まで歩き、汽車に乗って和歌山まで行って、そこから船で淡路島に向かいました。

### グラマン戦闘機<sup>\*7</sup>の機銃掃射を受けて

上賀茂から歩いて京都駅で汽車に乗り、奈良線経由で和歌山に着くと和歌山も空襲に遭ったところで、和歌山城が焼け燻（くすぶ）っていました。その横を歩いて加太港まで行きました。

加太港で40～50人が漁船に乗り込み、淡路島の由良へ行く途中、私たちが乗っている漁船のすぐ横を、「ババババーン」と水柱が挙がり、アメリカ軍のグラマン戦闘機の機銃掃射を受けました。もう少しで撃たれるところで、それが軍隊



グラマン戦闘機

ではじめての怖い経験でした。

由良へ入港し、由良から歩いて洲本、岩谷、福良、阿万（現在の南あわじ市）まで、淡路島を夜間縦断しました。

その時は、立って寝ることを初めて体験し、食べ物もなく歩くばかりでした。ヘトヘトどころか寝不足でふらふらになりながら、それでも何とか阿万に着きました。その明るる日、阿万から見た対岸の徳島は、空爆を受けて燃えているところでした。

## 淡路島で上陸作戦に備える

私たちの連隊は、淡路島は兵隊がいないので、アメリカ軍の上陸に備えるために送り込まれました。私は、陸軍が持つ拳銃や剣も身に付けていましたが、私より後からの入隊者は、水筒も竹筒で拳銃も持たせてもらえなかったそうです。

淡路島の山中は、縦横無尽にずい道（トンネル）が掘られていました。淡路島は、瓦など陶器の会社が多く、私たちの連隊は、その会社に入り、そこから山中のずい道に入って島の見張りにあたりました。淡路島は、今は高速が走り観光地になってきれいですが、当時は見渡す限りタマネギ畑でした。

軍隊の食事は、毎日、タマネギとタコばかりでした。ある時、何百人もの隊員みんなが食中毒になり、体育館みたいな講堂に並んで寝て、そこに一斗缶を並べ、首を突っ込み嘔吐しました。兵隊の数が多くて、たこが生煮えだったのではないかと思います。大変苦しみました。ごはんは、当番が受取りに行くのですが、早い者勝ちでした。

毎日の食事がタマネギとタコのため、1回だけ、夜に抜け出し、農家のなすびとカボチャを盗んで、生で食べたこともありました。

## 終戦を迎えて

8月15日に終戦を迎え、その後1週間ぐらいで、ほとんどの隊員は復員で帰って行きましたが、私を含め3人だけが残されました。残された理由は、ローマ字を知っていたので兵隊の名簿をローマ字で作成する作業でした。

これ以降、私たちは、憲兵の役職をもらい、憲兵になると、兵隊の長靴（ちょうか、軍用ブーツ）も巻脚絆（巻きゲートル）など、1人前の憲兵の装束を全部配給されました。腕には憲兵と書いた腕章をはめました。憲兵の下にはMPとあり、それまで星ひとつ（階級）でしたが、憲兵になってから、腕章のおかげで、他の兵隊から会うたびに敬礼されるようになりました。

10月26日だったと思いますが、私も家に帰ることになりました。

阿万から洲本まで歩いて行き、そこからは、タマネギを運搬する農家の方の

船が港にあり、その方をお願いして、タマネギ運搬船の上に 1 人乗せてもらって明石まで帰ってきました。汽車で明石から尼崎を経由して大阪まで帰る風景は、石灯籠ぐらいしか残ってなく何もありませんでした。全部爆撃されて焼け野原でした。一銭も持っていないのに汽車に乗せていただき、駅員や警官も含め、みんなに良くしていただき助かりました。

八幡に帰ったのは、夜中の 12 時頃でした。戸を叩いて「俺や、俺や」といったのを覚えています。

20 歳の若者が、6 月に入隊してから半年足らず、辛かったが今となっては良い体験をさせてもらいました。

### 戦争からの早い復興（太鼓まつりの再開）

青年団や太鼓まつりは、戦時中は中止されていました。

私が子どもの頃は、太鼓まつりは太鼓を担いでいる前後に提灯持ちとあって、子どもが提灯を持っていっぱい並んでいました。それが戦争のため、途絶えていました。

昭和 21 年（1946）に、青年団を立ち上げ、私が一区の志水青年団の支部長になりました。そこで太鼓まつりを行うことになりましたが、さて、太鼓はどこにあるのかわかりませんでした。あれこれ探していると、正法寺の縁の下に仕舞ってありました。

太鼓祭りは、青年団だけでは若いし、力がなく、35 才までの「玉垂会（たまだれかい）」と一緒に行いました。それから 2 年ほど続けて太鼓祭りを行いました。

昭和 20 年（1945）に戦争が終わり、21 年（1946）には、太鼓まつりや盆おどりができて復興は早かったと思います。

戦争は人の殺し合いで、人間性もなくす行為で二度とあってはなりません。少しでも若い人たちが伝えられればと思います。

.....  
(※1) **国民学校** 昭和 16 年（1941）3 月国民学校令が公布され、同年 4 月からそれ以前の小学校が国民学校に改められた。初等科 6 年、高等科 2 年で、ほかに特修科（1 年）をおくこともできた。「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為ス」ことを目的とした。

(※2) **青年学校** 昭和 10 年（1935）、実業補習学校・青年訓練所を統合し全国市町村に設置された教育機関。義務教育の尋常小学校（のちに国民学校初等科）6 年を卒業した後に、中等教育学校（中学校・高等女学校・実業学校）に進学せずに勤労に従事する青少年に対して初等教育の補習、職業教育および軍事訓練を施した。普通科（2 年）、本科（男 5 年、女 3 年）のほか、研究科（1 年以上）、専修科も置かれた。昭和 14 年（1939）、満 12 歳から 19 歳未満の男子は義務制となり、軍事教育が中心となった。

- (※3) **今のイズミヤ付近に爆弾が落とされ** 記録によると、1945年(昭和20年)5月11日午前9時45分ごろ、有智郷村戸津の麦畑に250キロ爆弾1発が落とされる。被害はなかった(『八幡市誌』第3巻)。
- (※4) **ほうらく(ほうらく)** 素焼きの、平たい土鍋。茶や豆、塩などをいるのに用いる。また、胡麻(ごま)や茶をいる専用の器として、縁が内側にめくれて、柄のついた小型のものもある。ほうらく。
- (※5) **少年戦車兵** 満15歳以上から18歳未満の志願者を少年戦車兵学校に入学させ、2年間の訓練を行い、実戦に投入した。戦局の悪化とともに前線に動員され、特攻作戦などによって17~18歳の若さで戦死した者が少なくない。少年戦車兵学校の競争率は極めて高く、「空の若鷺」(少年航空兵)とならんで「若獅子」(少年戦車兵)などと賛美することによって、軍国少年が育てられた。
- (※6) **予科練** 海軍飛行予科練習生の略。海軍は、航空機搭乗員の大量養成をねらいとして、1930年、小学校高等科卒業生を対象に、3年の課程で飛行搭乗員を要請する予科練習生を採用し、これを少年飛行兵と呼んだ。飛行予科練習生と改称されたのは昭和12年(1937)で、この年、中等学校4年修了者を1年半の課程で養成する甲種飛行予科練習生(甲飛)を新設し、従来の練習生を乙種(乙飛)とした。昭和15年(1940)には、海軍兵から選抜された丙種(丙飛)も設けた。甲種・乙種の年齢はともに14~15歳で、15年間で約24万人が入隊し、うち約2万4千人が実戦に投入された。特攻で出撃した者も多く、戦死者は約8割にのぼった。
- (※7) **グラマン戦闘機** グラマン社が設計しアメリカ海軍が第二次世界大戦中盤以降に使用した艦上戦闘機である。アメリカ海軍の本命は昭和15年(1940)に初飛行したF4Uであったが、実際には開発時期が遅いF6F(*Grumman F6F Hellcat*)が艦上戦闘機の主力となった。愛称のヘルキャットとは、直訳すると「地獄の猫」であるが、「性悪女」「意地の悪い女」という意味がある。

## 食料難と空襲

八木郷子（やぎ さとこ）

昭和9年（1934）5月27日生まれ

上津屋里垣内在住

### 食料難が当たり前

私は、大阪岸和田で生まれました。

昭和16年（1941）12月8日開戦の太平洋戦争が始まったころは、7歳で岸和田の国民学校初等科に入学していました。

当時の生活は、食糧の配給制が始まり、誰もが物の不自由な生活をしていたので、それが当たり前の生活だと思っていました。お米とかお砂糖が配給制でしたが、昭和17年（1942）には砂糖の配給はなくなりました。

昭和18年（1943）頃から、空襲警報が発令されましたが、まだ空爆はなく、その頃の生活は、田んぼでイナゴ取りやザリガニを取って食べていました。

ザリガニは、おいしくて、伊勢海老と同じ味でしたので、大好きでした。また、私たちが採ってきたイナゴを学校の先生が湯がいてくれて、それが唯一の蛋白源でした。学校の運動場は、どこも芋畑になっていましたが、私は収穫したことがありませんでした。みんな食糧難で、収穫するまでに、すでに誰かに盗まれていたからです。

普段のご飯は、少しの白米と麦、サツマイモを刻んだもので、今売っているさつま芋と違って、農林1号<sup>\*1</sup>と言って、早く大きくなりますが、不味い芋でした。この芋はごはんと一緒に炊くと青くなります。

### 空襲を体験

大阪湾岸で最初に空襲にあったのが昭和20年（1945）1月3日神戸で、炎上しているのが2階の窓から見えていました。そうして大阪、昭和20年（1945）3月13日の堺と続きました。

大阪は、御堂筋や戎橋筋辺りは焼夷弾で、京橋辺りは爆弾だったと思います。たぶんアメリカは、使い分けをしていたんだと思います。空襲は、たいいてい夜間、比較的短時間でした。無数の焼夷弾が流れ星のように落ちてきて、灯火管制された暗い夜空が明るくて、私が大きくなるまで花火が焼夷弾のように思え、怖くて見られませんでした。

大阪市内の同級生の多くは、学童疎開で、空襲を経験していません。私の住

んでいた岸和田市や堺市は、学童疎開の受け入れ先がありませんでした。田舎のある人は、空襲を避けられましたが、田舎がなかった私は、空襲を体験することになりました。

終戦の年、堺大空襲<sup>※2</sup>では、街の郊外から焼夷弾が落とされ、堺市の龍神駅近くの川では、水を求めた多くの人たちの遺体があり、軍隊が出て処理にあたりました。

戦況は報道規制され、広島、長崎に原子爆弾が投下された時は、今の新聞紙の半分ぐらいの紙面で、新型爆弾が投下されたと書いてありました。

私が、戦争で一番怖かったのは、大阪大空襲の時で、大阪梅田駅にいました。御堂筋以外は周辺焼け野原で、怪我をした人と恐怖心のあまり、どのように逃げたか分かりませんが、ふとその人を見ると手が伸びているではありませんか、それは完全に切断されず皮膚だけでかろうじて繋がっていたのです。

## 海に入れなくなった

終戦になり、私は、海辺で育ちながら、海に入った事はありませんでした。それは、海岸に機雷や、戦災に遭ったであろう多くの死体が漂着している光景が忘れられないからです。

大阪の街では、大手町会館など戦災で残った大きな建物は、アメリカに没収され、三越はPX<sup>※3</sup>と言って進駐軍専用のデパートになりました。

焼け跡の難波や戎橋通りにヤミ市ができ、売っているものは、ザリガニなど変な物が多かったですが、活気にあふれ希望に満ち溢れ、日一日変わっていきました。

戦争が終わって、防空壕に入らなくなったので、子ども心にほっとしました。

.....  
(※1) **農林1号** 昭和17年(1942)に命名登録され、関東から中部・近畿に普及。皮色は淡紅、肉色は黄白、でん粉歩留まりは高く、加熱後は粉質で食味は中、主に食用。

(※2) **堺大空襲**(さかいだいくうしゅう) 昭和20(1945)年3月13日を最初に、6月(2回)、7月、8月の5次にわたり空襲(焼夷弾・爆弾・機銃掃射等)を受けた。罹災した面積は、市域の62%に相当し、死傷者約3,000人、建物の全焼(壊)半焼(壊)は約1万9千戸、罹災者7万人をこえる大きな被害を被った。当時の堺市は、機械器具工業、木造船工業など軍需産業が勃興し、大阪市と密接な関係をもつ軍需工業都市となっており、また、大阪市の軍需工場の労働者に住宅を提供していたことが、激しい空襲を受けた原因であった。

(※3) **PX** アメリカ軍の基地内の売店(post exchange)。日本(とりわけ東京)では戦後占領軍によって多数の商業施設が接収され、米兵向けPXとして使われた。

## 疎開と戦時中

増田 清司（ますだ きよし）

昭和 13 年（1938）3 月 17 日生まれ

川口浜在住

### 大阪から香川へ疎開

私は昭和 13 年（1938）生まれです。

当時の家族は、父、母、兄 3 人、姉、と私の 7 人家族で大阪市都島区都中通に住んでいましたが、私が 5 歳か 6 歳の時に戦火で全焼しました。その後、京阪電鉄の森小路に引っ越しをしました。

戦争が日々激しくなり、夜は毎日、南の方の大阪城、京橋方面を見ると、B 29 の焼夷弾で空が真っ赤で昼みたいでした。身の危険を感じて親たちが相談し、私と母だけ、香川県綾歌郡岡田村（現在の丸亀市）の母方の親戚に疎開することに決まりました。

昭和 20 年（1945）頃でしょうか。疎開先では、国民学校 1 年の途中に入学し、帰りはいつも一人でした。村の子どもたちに都会から来たからか、いつも石を投げられ、いじめられていました。そこでは、親戚宅の裏の納屋で、半年か 1 年ほど住まわせていただきました。夕食は親戚のおじさんが帰ってくるまで与えられず、いつも遅くて辛かったです。毎日、悲しくて母と二人、大阪へ早く帰りたいとよく泣きました。

私の姉も集団疎開で大阪府北河内郡星田村（現在の交野市）の寺に 1 人で行きました。

### 機銃掃射を受ける

国民学校 1 年の時です。いつも通り 1 人で学校の帰り、はるか後ろの方から飛行機の爆音が聞こえてきました。

私が振り向くと、アメリカの戦闘機が低空飛行しており、水中メガネの様なものをかけていたパイロットの顔がはっきり見えました。すると、「バン！バン！バン！バン！」と 2 メートル間隔ぐらいに銃撃をしてきました。私は、農道を歩いていましたが、とっさに稲穂の実っている田んぼのあぜ道に走って逃げ伏せました。1 回通り過ぎ、ほっとしていると、戦闘機は、また引き返してきて銃撃してきました。足元と頭の上には無数の銃弾が飛び散っていました。戦闘機は、高松の方から来て、琴平の方へ去っていきました。

今考えると面白半分で撃ったのか、また子ども1人でも殺したかったのかは、よくわかりません。幸い九死に一生を得ることができました。

## 生き地獄

昭和20年(1945)7月か8月の初めの頃だったと思います。兄(三男)に赤紙※<sup>1</sup>が来ました。私は、母と姉の3人で大手前馬場町の大阪城広場へ旗を持って見送りに行きました。その日は運悪く、関西で一番ひどい空襲※<sup>2</sup>でした。爆弾が10メートルぐらいごとに落ち、周囲は穴だらけでした。



空襲から10ヶ月後の京橋駅 昭和21年(1946)6月

私たち3人は大きな木の下でうずくまり身を寄せ合っていました。目の前におそらく100人ぐらいは入れる防空壕があるのですが、爆弾の振動で地面が揺れて、防空壕まで歩いて行くことが出来ません。その瞬間、大きな音とともに爆弾が防空壕に直撃し、何とも言えない悲鳴が聞こえ、人が空に向かって数十体、飛び散っていました。

私は、顔に土をかぶり目が見えなくなりました。手で土を取り除きやっとな、かすかに視界が広がってきました。何とか立ち上がり足元の死体をよけながら3人が手を取り合って京橋まで必死で逃げました。

国鉄(JR西日本)と京阪(京阪電車)京橋駅間の被害がひどく、道に死体が数えきれないほど折り重なり、足のない人、手のない人、血で顔が男性か女性か判別できない人たちがうずくまっていました。血が道路いっぱい、ネバネバし足がすべり、死体をよけるため何度も転びました。まさに生き地獄でした。私は、未だ脳裏に鮮明に焼き付いています。

## 現物支給のバケツ

兄(三男)は、19歳ごろだったと思いますが、今里の町工場に勤めていました。

当時の給料の半分は現物支給で、毎月バケツ20個から25個を持って帰ってきました。家族全員が食べていくため、このバケツをお金か食料に換えなければなりません。いつも母、姉、私の3人でバケツを背負い、父の実家がある関係で近鉄電車に乗り、伊勢松阪の手前の中川※<sup>3</sup>という駅で降り、知らない田舎の家々を一軒ずつ回るのです。反物とか着物等であれば、米、麦等に替えてくれるのですが、何分にもバケツでは馬鹿にされ、話もろくに聞いてもらえません。それでも朝から夕方までかかり、やっとな芋やカボチャに替えて

もらい喜んで電車で夜3人が帰るのですが、必ず途中の名張駅（なばり）で警察が乗り込んで来て全部取り上げるのです。私だけ事前に窓から線路に飛び降り、難を逃れたこともありました。

しかし、今考えると、警察が取り上げた品物はどこへ行ったんでしょうか。

## 草と芋

昭和20年（1945）か21年（1946）頃のことです。食料品は配給制で、米、麦、砂糖、塩、たばこ他あらゆるものが手に入りにくくなってきました。特に私の家では、毎日の食事は、麦、さつまいも、カボチャ等が中心で、お米のごはんは、年に2回位しか食べられませんでした。

ある日、夕方、母が今晚食べるものが全くないので草でもとってくるように言われました。私は、家の前の京阪電車の土手に行き、手当たり次第に軟らかい草を取り家に持って帰り、炊いて全員で食べたこともありました。

その時期、兄（次男）が肺炎と栄養失調で死にました。生活費の一部に充てるため、さつまいもをふかし、京橋駅へ母と兄（三男）が2日おきに売りに行きました。案外よく売れましたことを覚えています。

今後、二度とあつてはならない戦争、私は体験者として次の世代の人たちに伝えることが義務だと思っています。

.....  
(※1) **赤紙（召集令状）** 軍隊が在郷軍人（現役を終えた予備役・後備役など）を軍隊に召集するために出した令状。その地色が赤かったので、**赤紙**と呼ばれた。当初は真っ赤だったが、戦争が長引くにつれて染料の節約のため次第に薄くなり、ピンク（淡紅色、桃色）に近くなった。令状は、連隊区→警察→市役所・町村役場の順におりてきて、特別に任命された「急使」が本人またはその家に令状を直接届けた。

(※2) **関西で一番ひどい空襲** この空襲は、昭和20年（1945）8月14日の第8回大阪大空襲（京橋大空襲）である。B29爆撃機約150機が大阪への空襲をおこなった。アメリカ軍機は大阪陸軍造兵廠を狙い、約700トンの1トン爆弾を集中的に投下した。その流れ弾の4発が京橋駅に落ち、1発は片町線ホームに高架上の城東線（現・環状線）を突き抜け、避難していた乗客らが直撃された。この空襲での犠牲者は、身元の判明している人だけでも210人以上、ほかに身元不明の犠牲者が500ないし600人以上（正確な犠牲者数は不明）とされている。

(※3) **中川駅** 現在の近畿日本鉄道（近鉄）の伊勢中川駅。



空襲後の大阪市街  
左端は南海難波駅、右手前には松坂屋大阪店(現・高島屋東別館)、中央に大阪歌舞伎座が認められる。



京橋駅南口の大坂大空襲  
京橋駅爆撃被災者慰霊碑

## 軍事訓練と召集令状

川村昭三（かわむら しょうぞう）

昭和3年（1928）1月1日生まれ

八幡長田在住

私は、昭和2年（1927）生まれですが、戸籍上は昭和3年（1928）生まれです。

昭和12年（1937）年7月7日に支那事変<sup>※1</sup>が勃発したことや同年8月17日の宇治火薬庫大爆発<sup>※2</sup>、昭和14年（1939）3月1日に起こった枚方の火薬庫（禁野火薬庫<sup>※3</sup> 枚方砲営工廠）の爆発などを、今でもはっきりと覚えています。

私は、尋常高等小学校を卒業後に、青年学校に入りました。青年学校は、普通科2年、本科5年の卒業で18歳になります。

その青年学校は、週3回で、私は覚えられましたけど、軍隊五箇条や軍人勅諭<sup>※4</sup>は全部暗記しなければなりませんでした。午前中は学科、最初は英語の教科がありましたが英語の教科がなくなり、午後は軍事訓練の毎日でした。今の馬場運動公園が訓練場で、教官は戦争から帰ってきた兵隊さんが教官でした。本科3年までは銃を持たせてもらえませんが、4年から重い三八銃<sup>※5</sup>を持たされ訓練をしました。

支那事変の時は、勝ち戦だったので、食糧難もなく平穏でしたが、大東亜戦争が勃発した昭和16年（1941）12月8日（海軍が行った真珠湾攻撃）後は、食糧難とお金のない時期となりました。

昭和18年（1943）か19年（1944）から国債の割り当てがあり、上流、中流、下流の3段階に分かれて国債購入が半年に1回ぐらい割り当てられ、義務付けられていました。この国債は、軍事費に充てられるものでした。当時は、農家でお金がなく、以前に購入した国債を郵便局に持参し、利息なし（たとえば10円で買ったものを10円で購入してもらう）で売り払い、次の国債の購入資金にしていました。

### 食料が配給制になる

太平洋戦争から食料が配給制になり、農家は、強権発動<sup>※6</sup>で警察権力を使って米を強制的に供出させられ、個別に農家を調査しました。農家では、肥料は人糞を使っており、その人糞を溜める「タンゴ<sup>※7</sup>」に米を隠し、供出を逃れた方もおられたと聞きました。

食料危機は続き、敗戦による農作物生産の低下で供米成績のよくない地域に駐留米軍将校が分担して督促に回りました。昭和 24 年（1949）には、八幡町に米軍将校のリッチ大佐が、役員の案内で巡回し、米びつの中まで調べる念の入れようでした。

## 米の配給

1 軒に 1 人米 2 合 6 勺の配給<sup>※8</sup>は、農家も同様でした。戦局が悪くなって、食料を増産することになり、米の他にも麦〔大麦〕や小麦、じゃがいもなどを強制的に作らされました。中ノ山の竹やぶや山をつるはしで開墾して、美味しくないが大きくなる「護国薯（ごこくいも）」というさつま芋を町内で栽培していました。

近所でもお金がなくて、米 2 合 6 勺の配給品を買うことができない家がでてきました。仕事がないからです。私の家も農家でしたが、農業だけでは食べていけず、あらゆるところに日雇いの仕事に行きました。海軍の仕事にも行きました。この頃には B29 爆撃機が飛んできました。

## 家に帰りたい

18 歳で青年学校を卒業した頃、青紙（防衛召集）<sup>※9</sup>が届き、1 週間ほど八幡小学校で厳しい軍事訓練が始まりました。

大変厳しい訓練でした。行軍訓練が主で、悪ければ銃で尻を叩かれます。顔を殴らないのは、死んだら困るからです。

その後、松ヶ崎（左京区）に 6 週間泊りで綴喜郡内から集められ、八幡からは私だけの参加だったと思います。筋骨薄弱者という徴兵検査で身長や体重が検査合格に満たない人たちが、体をつくるための特殊訓練をさせられました。

行軍訓練では、背の高い者から並んで行軍するため、背の低い私は後ろの方でした。そのため、行軍中に小休止（15 分）大休止（30 分）の休憩命令がありますが、先頭から順に休憩を取るため、背の低い者は伝達が遅れ、私は小休止ではいつも休めませんでした。このままでは 40 日間休憩する間もないと思っていました。

訓練 3 日目ぐらいに教官がラッパを吹く者を探していました。

私は、八幡小学校で戦死者のための町葬で、ラッパを吹いていたことから志願し、採用されて行軍の先頭になることが出来ました。先頭になったことで休憩ができ、楽ができました。

夜になれば、電車の遮断機の音だけが物悲しく鳴り響くだけで、私は、家が恋しくなり、「こんな訓練ばかり嫌やなあ、早く家に帰りたい」と、每晚思っていました。

訓練が終わって、自宅へ帰ってからのことです。戦況は悪くなり、学校は休校になり、今度は伏見桃山で1週間ほど訓練する場所へ行きました。桃山では、食事もゆっくり食べることができず、音を出して食べることもできませんでした。ここでは、軍人育成のため、お米を食べることができました。

18歳のころですが、戦況が悪くなる一方で、B29爆撃機がどんどん飛んできて、イズミヤのあたりで250キロ爆弾が落とされました。我が家付近でも焼夷弾の不発弾を落とされたことが入りました。

### 召集令状が届く

昭和20年(1945)3月13日から大阪大空襲があり、大阪が焼け野原になりました。その年の8月の初旬に、本来、兵役は20歳以上ですが<sup>※10</sup>18歳の私にも召集令状が届きました。すでに沖縄に米軍は上陸していましたが、本土には上陸していませんでした。18歳の私に召集令状が届いたのは、それだけ戦況が悪化し、本土決戦のための兵隊がいなかったのだと思います。

### 徴兵検査<sup>※11</sup>

徴兵検査については、甲種は合格、第1乙、第2乙、第3乙種、丙種の5段階で判定され、甲種は頑丈な人で、現役で3年間の兵役でした。

戦況が悪くなってくると第1乙種も甲種に編入されました。

それでも兵隊が不足していた様で、第2乙、第3乙まで甲種に編入し召集がかけられました。丙種は体力的に兵隊に向かない者でした。最後は丙種の人も徴兵されました。

当時は、兵隊に行かないと「国賊(こくぞく)」と言われ、それを苦に亡くなられた人もいました。兵隊に行かないことは恥みたいな風潮で、兵隊に行くことが名誉でみんな兵隊に行きたがっていました。

近所の人でも丙種で徴兵され、即日帰郷されました。周りから国賊、国賊と言われ、それを苦にして家から出られず亡くなられました。

8月初旬に召集令状が届き、伏見の藤森にある中部37部隊に入隊なのか、観月橋には工兵隊があり、どちらなのかと思っていました。私は、中部37部隊の本隊には入れず田辺にあった仮部隊の、2千2百何部隊だったかと思いますが、そこに入隊しました。

終戦まで2週間の間でしたが銃や飯ごう、軍服もなく、柳行李<sup>※12</sup>弁当の中は、麦とジャガ芋を細か



旧日本軍の行李

くみじん切りにしたものに米粒が数えられるほどの質素なものでした。それでも空腹のため、美味しく食べられました。

その当時のことを考えたら、今の時代は幸せです。混合部隊で、2週間も経ちましたか、田の畔で訓練させられました。軍隊は奴隷と同じ扱いでした。空襲警報のサイレンが鳴ると、灯りが漏れないように電灯を風呂敷で隠すよう役所から指示があり、B29爆撃機から見えないよう暗くしていました。

入隊して3日ほど経ったころ、衛兵として歩哨に立つことになりました。相手が下士官の場合だと銃でお辞儀する程度ですが、上官には捧げ銃（ささげつつ）<sup>※13</sup>をしなければなりません。他の部隊に森少佐という方がおられたのですが、その少佐に「捧げ銃」を怠ってしませんでした。

少佐から「きみなあ、いくつや」といわれ、私は、「18歳です」と答えました。少佐は、「そうか、18歳か。尉官級以上は、捧げ銃をしなければあかんで、それだけ教えといてあげるわ。今日のところは許したる。」と言われ、助かったことを記憶しています。

そんなことがあって、3日ほど経ったときに中隊長から呼ばれました。何もしていないのに何で呼ばれるのかと思っていました。

軍隊には、従卒というのがあって下士官以上しかなれませんでした。私たちの部隊は混合部隊であったこともあり、新兵なのに中隊長の従卒を命じられました。中隊長の部屋に入ると、そこには果物が何でもありました。

「川村二等兵、本日を以て中隊長の従卒を命じる」と言われました。復唱しなさいと言われましたが、1回聞いただけでわからず、「わかりません」といったら怒られ、「忘れました」と言ったらもう1回説明してくれて、復唱できました。中隊長からこれ食べろと、スモモをいただきました。新兵なのでその場で食べることができず持って帰りますと言ったら、それはダメだと言われました。

中隊長の従卒は、はがきの投函など、なんでも従卒がしなければなりません。

郵便物の投函を命じられ外に行くと、新兵なので敬礼ばかりしなければなりません。一等兵でも年はひとつ上です。自慢やないけど青年学校で成績が良かったから新兵でも従卒になったのかと思っています。

昭和20年8月15日に終戦になって、除隊しました。家に帰るとき、隠匿物資のさらしを1反もらいました。

.....

(※1) 支那事変（しなじへん） 昭和12年（1937）から始まった日本と中華民国で行われた長期間かつ大規模な戦闘。双方とも宣戦布告や最後通告を行わず、戦争という体裁を望まなかった。支那事変は、当時の日本政府の定めた公称（昭和12年9月2日閣議決定、事変呼称二閣スル件「今回ノ事変ハ之ヲ支那事変ト称ス」）である。昭和12年（1941）12月8日の日米開戦とともに蒋介石政権は、翌9日に日本に宣戦布告し、日中間は正式に戦争へ突入していった。同12月、日本政府は「今次ノ対米英戦争及今後情勢ノ推移ニ伴ヒ生起スルコトアルヘキ戦争ハ支那事変ヲモ含メ大

東亜戦争ト呼称ス」と決定した。（昭和 16 年 12 月 12 日閣議決定）

日本では初め北支事変（ほくしじへん）、後には支那事変（しなじへん）の呼称を用いた。新聞等マスコミでは日華事変（にっかじへん）などの表現が使われる場合もあった。日支事変（にっしじへん）とも呼ばれる。「支那事変」という呼称は、当時の日本政府が定めた公称であるが、現在は、太平洋戦争（大東亜戦争）勃発後も含めて日中戦争とも呼ばれる。しかし、日中戦争は昭和 12 年（1937）から昭和 20 年（1945）までの戦争を指すことが一般的であるが、「支那事変」は昭和 12 年（1937）から昭和 20 年（1945）12 月 8 日までとするのが代表的見解とされており、期間が異なる。なお、始期については、昭和 12 年（1937）7 月の蘆溝橋事件をきっかけとする立場と同年 8 月 13 日の第二次上海事変とする考え方がある。

- (※2) **宇治火薬製造所** 明治初年、大阪の軍事拠点化にもなって宇治に火薬貯蔵庫が設置された。日清戦争が勃発すると、火薬製造所が建設されることになり、この年早くも仮製造所として操業を始めた。明治 29 年（1896）、宇治火薬製造所が正式に開所され、明治 37 年（1904）日露戦争が始まると、紀伊郡伏見町向島に木幡分工場が建設された。宇治火薬庫の爆発は、昭和 12 年（1937）8 月 16 日深夜に起こり、火柱が数百メートルに達し、京都市内からでも見えるほどだったという。前後 3 回の爆発があり、周辺 4 キロ四方の民家 800 戸以上に被害を与え、死者 7 人を出した。現在の黄檗公園の周辺に残っているのは、その土塁とトンネルの部分である。



- (※3) **禁野火薬庫** 日清戦争後の明治 29 年（1896）年、枚方禁野に完成。綿火薬庫、弾薬庫などの建物が 20 数棟建てられた。30 年代には火薬庫・弾丸庫が次々と建設され、昭和 13 年（1938）には、

東隣に陸軍造兵廠大阪工廠枚方製造所が開設され、砲弾・火薬製造の一大拠点となった。昭和 14 年（1939）3 月 1 日 14 時 45 分、火薬庫東端の弾丸庫で砲弾解体中に大爆発が起こった。19 時までには 30 回近くの爆発が起き、爆発による火災は 3 月 3 日の正午まで続いた。弾丸の破片は半径 2 キロにわたって飛散し、禁野・中宮など近隣の集落に延焼した。死者 94 人、重軽傷者約 550 人を数える大惨事となった。



- (※4) **軍人勅諭**（ぐんじんちよくゆ） 1882 年（明治 15 年）、明治天皇が直接軍人に伝える形式をとって公布された。前文で軍の統帥は大元帥としての天皇があたると述べ、後半で 5 徳目を掲げて天皇への絶対服従を強調した。陸軍新兵教育では丸暗記が強要されて、覚えないと制裁されたので、徴兵年齢が近づいた若者は一生懸命丸暗記しようとした。文中の「軍隊五箇条」とは、以下の 5 徳目を指す。

- 一（ひとつ）軍人は忠節を尽すを本分とすべし。
- 一（ひとつ）軍人は礼儀を正しくすべし。
- 一（ひとつ）軍事は武勇を尚（とうと）ぶべし。
- 一（ひとつ）軍人は信義を重んずべし。
- 一（ひとつ）軍人は質素を旨とすべし。

- (※5) **三八銃 三八式歩兵銃** (さんぱちじゅうさんぱちしきほへいじゅう) 明治 38 年 (1905) 年に制定された日本軍の小銃で、アジア・太平洋戦争終結まで使用された。



- (※6) **強権発動** 強権を実際に行行使すること。この場合は、農家が米の供出を拒んだとき、政府が警察力を使って強制的に供出させたこと。
- (※7) **タンゴ** 「たんご」は「桶」を表す。例文「昔はこえたんごかついで畑に行く人をよう見たけど、この頃見んようになったなあ。」
- (※8) **2合6勺の配給** 米の割当配給は、昭和 17 年 (1942) 3 月までにほぼ全国に実施されたが、その時の配給基準は、1 人 1 日 2 合 3 勺であった。実際には、年齢や労働の質 (重労働か普通か) によって幾分か増減があった。昭和 20 年 (1945) 7 月、配給基準は 1 人 1 日 2 合 1 勺に減らされた。
- (※9) **青紙** 青紙の「防衛召集」とは、戦時または事変に防衛上必要ある場合において、防空または警備の任に就かせるために、在郷軍人を短期間召集すること。
- (※10) **兵役は 20 歳以上** 実際には昭和 18 年 (1943) の改正で、現役は 1 歳繰り下げられて 19 歳からとなった。さらに昭和 19 年 (1944) 3 月に改正された兵役法施行令によって、17 歳から兵籍に編入することが可能になった。「18 歳の私にも召集令状が届きました」とあるのは、それに基づいていたと思われる。
- (※11) **徴兵検査** 男子は 20 歳になる年に徴兵検査を受けることになっていた。検査によって、甲種、乙種 (第一乙種・第二乙種)、丙種、丁種、戊種に区分された。甲種・乙種が現役に適する者とされたが、平時においては、甲種でくじ引きに当たった者が現役兵となった。戦時には乙種も召集の対象となり、戦局が悪化すると「筋骨薄弱」とされた丙種まで動員せざるをえなくなった。なお、昭和 14 年 (1939) には、第三乙種が新たに設けられ、甲種と第一乙種が現役、第二乙種が第一補充兵、第三乙種が第二補充兵とされた。
- (※12) **柳行李** コリヤナギを編んだもの。竹や柳、籐などを編んでつくられた葛籠 (つづらかご) の一種。直方体の容器でかぶせ蓋となっている。衣料や文書あるいは雑物を入れるために用いる道具。衣類や身の回りの品の収納あるいは旅行用の荷物入れなどに用いられた (写真)。
- (※13) **捧げ銃** (ささげつつ) 軍隊の敬礼のひとつ。銃を両手でからだの中央前に垂直にささげ持ち、相手の目に注目する。また、その号令。

## 特攻志願

匿名希望

昭和2年（1927）9月29日生まれ  
美濃山在住

私は、海軍予科練習生に入りました。  
飛行機で飛んだというのは14期まで  
でしょうか、赤とんぼ<sup>※1</sup>で飛べましたが  
13期<sup>※2</sup>は、赤とんぼの所に行ったけれど  
制空権<sup>※3</sup>は完全にアメリカのもので、練  
習することができないのです。



飛行中の九三式陸上中間練習機（赤とんぼ）

それは、昭和19年（1944）4月に予科  
練教程を終わるのですが、赤とんぼに乗って飛んでいられる状況ではありません  
でした。

九州方面の飛行場は全滅で、私のいた美保の航空隊（今の米子空港）なんか  
は、練習よりも九州から避難した飛行機で一杯でした。

昭和19年（1944）4月で予科が終わって、5月から飛行訓練に入りますが、  
避難した飛行機で訓練が出来ず、飛行場の設営に携わっていました。

美保の兵舎は、300人1個分隊の兵舎が20棟並んでいる壮大なもので、5月  
の20日ごろですか、夜中の兵舎で総員起こしがあり、通路に整列していますと  
分隊長から「きさまたちの命は、この分隊長が預かっておるが！」から始まり、  
これから特攻隊員<sup>※4</sup>を募ると言うのです。

「希望のある者！一歩前へ！」当然、全員が一歩前です。

その夜、1人ずつ分隊長に呼ばれ、「何か言いたいことがあるか？」と言われ、  
私は、「弟がおりますので、家の心配はありません。」と言いました。

翌日に特攻隊員名簿の発表があり、その中に私の名前が載っていました。名  
簿の中には、自分の血で嘆願書を書いて出した者もいました。

特攻隊員になれば、特攻休暇があり、家に帰って最後に家族と過ごすので  
すが、休暇の前に、親や友だちが聞いたらこう答えていました。

「我々は、そこから先は、原隊に復帰して帰ってからでないと分かりません！」  
と言うように研修を受けてからでないと休暇をもらえませんでした。

私も5月23日から27日まで休暇で家に帰って、頭の毛を切り、爪を切って  
遺品として仏壇に供えました。



回天一型（靖国神社併設の宝物館展示）

それから隊にもどった場所が、山口県柳井市に海軍の潜水学校がありまして海軍徳山潜水学校の柳井分校<sup>※5</sup>でした。そこは、特攻兵器「回天」「海龍」「震洋」「蛟龍」がありました。回天<sup>※6</sup>は、1人乗りの人間魚雷で敵艦に体当たりします。海龍<sup>※7</sup>は回天のように体当たりをするのですが船体に2本の魚雷を装備しており、2本の魚雷を発射してから本体を敵艦に体当たりするものです。震洋<sup>※8</sup>はベニア合板で出来たボートでエン

ジンは自動車エンジンで爆薬を積んで敵艦に体当たりするものですが、当たる前に敵艦に発見されて破壊されるため、分校では回天の操縦訓練での支援に使われていました。

蛟龍<sup>※9</sup>は、海龍より大きく真珠湾攻撃で使用された特殊潜航艇<sup>※10</sup>の流れを汲む特殊潜航艇で、私の棺桶でした。飛行訓練しか受けていなかったのが潜航艇のことをいろいろと教わることになるのですが実戦訓練に入る頃には終戦になりました。

分校では、回天の実戦訓練が行われました。回天の訓練は、航続時間が40分なので伊号潜水艦<sup>※11</sup>に積んでもらい敵艦の近くまで行き、切り離されて敵艦に体当たりするもので、再三、バランスを崩して海面を飛び出して垂直に突き刺さっている光景を見ていました。沖には潜水艦3隻と駆逐艦が待機、支援に震洋が追従していました。時々アメリカのグラマン戦闘機の攻撃に遭いますが、潜水艦は水中へ隠れ、駆逐艦は、たくさんの爆弾攻撃を受けますが小型艦の小回りの良さでなかなか当たりませんでした。最後の出陣では、まわりの漁船が多く見送りに来ており、日の丸の鉢巻きをした搭乗員を私たちは脱帽して見送りましたが、恐らく宿毛<sup>※12</sup>に集結して本土決戦に備えるのでしょうか、その後の回天の戦果は、聞いていません。

8月15日の終戦の玉音放送<sup>※13</sup>を聞いて「やっと戦争が終わったんだ！」「俺！命があるのだ」と不思議に思いました。

.....  
(※1) **赤とんぼ** 海軍の練習機、93 式中間練習機のこと。目立つように橙色（だいだい色）に塗られていたことから「あかとんぼ」と呼ばれた。

(※2) **13 期** 13 期は昭和 18 年（1943）に予科練に志願し入隊した者。卒業して飛行練習生まで進めたのは 13 期までである。

(※3) **制空権** 航空戦において味方の航空戦力が敵の航空戦力より優勢であり、敵から大きな妨害も受けることなく諸作戦を実施できる状態。

- (※4) **特攻隊**（とっこうたい） 特別攻撃隊の略称。アジア・太平洋戦争末期に日本軍が編成した、生還を期さない体当たり攻撃部隊。昭和 19 年（1944）10 月頃から航空機によって実施されるが、アメリカ軍が本土に近づくにつれて、海上・陸上でさまざまな兵器によって行われた。
- (※5) **海軍徳山潜水学校の柳井分校** 海軍の潜水艦乗組員を養成する教育機関が潜水学校で、ここでは、海軍潜水学校柳井分校を指している。柳井分校は、特殊潜航艇（※9 参照）の訓練を目的として昭和 19 年（1944）に設置された。
- (※6) **回天**（かいてん） 特攻兵器の一つで、乗員 1 人が操縦し敵艦船に体当たりする魚雷として使用された。昭和 20 年（1945）5 月に兵器として採用された。

- (※7) **海龍**（かいりゅう） 2 人乗りで、魚雷もしくは体当たり攻撃を行う水中特攻兵器。昭和 20 年（1945）5 月に兵器として採用され、各地の突撃隊に配属されたが、本土決戦が回避されたため実戦で大規模に投入されることはなかった。



海龍（大和ミュージアム展示）

- (※8) **震洋**（しんよう） 海軍が製作した特攻用の小型モーターボート。昭和 19 年（1944）8 月に兵器に採用された。船首に爆薬を装着し、搭乗員が乗り込んで目標艦艇に体当たり攻撃を行った。
- (※9) **蚊龍**（こうりゅう） 特殊潜航艇の一種。真珠湾で使用された特殊小型潜水艇（甲標的）を大型化したもの。昭和 20 年（1945）5 月に兵器として採用され各地に配備されたが、海龍と同じくほとんど実戦では使用されていない。



蚊龍呉のドックにて建造途上で放置された状態の蚊龍

- (※10) **特殊潜航艇** 敵海軍の泊地襲撃や、作戦員潜入などに使われる軍用潜水艇・小型潜水艦。
- (※11) **伊号潜水艦** 基準排水量 1,000 トン以上の一等潜水艦のこと。潜水艦は排水量別にランク分けされ、排水量が多い順に上からイ・ロ・ハで分類された。
- (※12) **宿毛**（すくも） 宿毛湾は非常に水深が深く、大型の船が出入りしやすいことから、昭和 8 年（1933）ごろより、多くの常設の海軍基地が配置された。戦艦大和が試験運行されたことがある。現在の高知県宿毛市
- (※13) **玉音放送** 天皇の肉声を放送すること。昭和 20 年（1945）8 月 15 日に天皇による終戦の放送を指すことが多い。

## 朝鮮からの引き揚げ

前川 美智子（まえがわ みちこ）  
昭和5年（1930）8月12日生まれ  
八幡清水井在住

### 朝鮮で生まれ育つ

私は、戦争中は朝鮮にいました。

私の両親は、八幡出身ですが朝鮮の京畿道・仁川(じんせん＝インチョン) ※1で生まれ育ちました。京城(けいじょう＝今のソウル)までは汽車で1時間のところでした。先に仁川に行っていた父の兄の事業が軌道に乗ったので、私の父も朝鮮に渡り、そこで事業をし、35年間住んでいました。父は八幡に帰って結婚し、また仁川へもどり、畳屋を行っていました。

私が朝鮮の女学校にいた時、仁川で生まれた日本人がたくさんいました。私は女学校の34回生でした。朝鮮では爆撃なんて1回もありませんでした。警戒警報が鳴ったら、名古屋とかが空襲警報になり、九州で警戒警報になったら、大阪が空襲警報になる。それで、九州で警戒警報になったら、次に朝鮮で警戒警報が鳴るということです。だから、すごく悠長な時間があるのです。「あ、もう九州で空襲警報が入ったから、そのうち朝鮮の方に爆撃が来るのかなあ」と思っていれば、1時間ぐらいたら私が住んでいる朝鮮に警戒警報が入ってくるのです。でも爆撃なんか1回もありません。だから戦争自体の怖さは知りません。

### 引き揚げ※2で日本へ

終戦を迎えて、引き揚げとなりました。

兄が兵隊に行っていたので、優先的に引き揚げ船に乗せてもらいました。なかなか帰国できない人や寄留される人もいる中で、引き揚げの第1回目で千円のお金を持って、帰国させてもらいました。引き揚げの際、布団の敷布をたたんで、大きなリュックサックを作り、枕カバーみたいな物をポケットにして、欲しい物を詰めます。

私は、学生でしたのでノートとか鉛筆を持って帰らなだめだと思っていましたが、母親が、自分の着物と父ちゃんの着物を持って帰れと詰め込み、私たちの荷物は減らされました。何かあった時に服にできると、セル※3という着物を無理やり入れられました。帰国してから生活が苦しく、服地も買えなかったの

で、その着物を服地にしてスーツを縫いました。学校を卒業して勤めるときにセルの反物をスーツにしてそれを着て会社に行きました。

## 仁川（インチョン）から釜山（プサン）港へ

引き揚げの時は仁川（インチョン）から釜山（プサン）まで汽車で行くのですが、馬が乗る窓がない貨車に詰め込まれ、リュックサックを真ん中に並んで置き、そこに、2日間立ったままでした。トイレだけは昼に停めてくれ、田んぼみたいな所で用を足しました。

夜になれば汽車は止まり。「娘（むすめ）をだせ」と、朝鮮の人らが大声で叫びます。父たちが、中を見せないように体で隠して、乗降口で「娘はいない」と言いながら、お金を渡していました。そうして、お金を渡すことで、汽車を動かしてもらうのです。道中で何箇所か、汽車を止めるところがあるみたいで、その都度、父らはお金を集めて渡していました。それで釜山まで2日かかりました。

釜山まで来たら、お寺に収容されました。みんなの食事は、自分らが持参しているお米を渡すのです。私たち家族は、両親と女の子の5人。5人が食べるのなら一升の米を出しなさいと言われ、その半分の5合を炊いたものを渡してくれました。それを家族で食べるのですが、おかずは何もない。持参の梅干しぐらいでした。

主人が兵隊に行っていて、お子さんを2人ぐらい連れている夫婦は、乳飲み子を連れているので、引き揚げの際、おむつとか着替えを持たなければなりません。だから食べるものを持ってきてはいけません。そんな人は食べるものがないので、母が見かねて、米を炒ったものをあげました。子どもらは、ゆっくり舐めながら柔らかくなるまで、口に含んでいました。

お寺で一晩泊まって、夜中の2時に埠頭（棧橋）まで行かされました。棧橋は潮風で寒く、坂になっていて、並んだら100人はいかないけど、50人以上は並べ、そこに座りました。11月の朝鮮は寒く、毛糸のマフラーを巻き防寒着、オーバーを着て、寒さを防ぎました。棧橋に座ると急に眠たくなり、寝てしまいました。あまりにも寒くて目が覚めると、マフラーが盗まれてありませんでした。周りを見ると、帽子がなくなっている人もいました。両親が隣で寝ているにも関わらず、誰が盗ったかわかりませんでした。寒さで、「寒う」って声に何人かが目を覚まし、私は、マフラーがないのに気が付いて、「首巻（マフラー）がない」、「首巻ない」って言いましたが、戻ってきませんでした。そこで朝まで過ごし、また別の場所へ歩いて移動するのです。足場が悪く細い道を歩かされ、昼前までかかり埠頭まで行きました。

埠頭で引き揚げ船を待っていると、フェンスの向こうで朝鮮人の子どもが竹

竿を持って立っています。朝鮮から引き揚げする際、朝鮮紙幣は使えなくなります。日本紙幣しか使えなくなるから、みんな朝鮮紙幣をそこで捨てるわけです。ぴゅーぴゅーと風でお金が飛び散るのを足の速い子は拾うのですが、小さい子どもは、なかなか取れず、お金がぴゅぴゅっと動くのです。必至で子どもが拾うのを見て、父が、1円札を丸めてフェンスの間から入れてあげて、「コマプソ（ありがとう）※4」、「コマプソ（ありがとう）」と喜んでお礼を言われていました。

一方では、「自分らはこうして苦しんで日本に帰らなあかん。何でこんな朝鮮人の子どもにお金をあげなあかんねん。あっちへ行け」という人もおられました。ひどい暴言を言う人もありました。でも、そんな人ばかりでなく、自分らは苦しいけど、この子たちもかわいそうと、自分のちょっとしたものをあげたりする人もありました。

## 引き揚げ船で

引き揚げ船に乗り込む前にMP※5と朝鮮人によるリュックサックの検査があり、トランクなどは検査するのにひっくり返されました。父もトランクを持っており、あんなことされたらどないしようと思って、おどおどしていました。私たち家族の順番になり、父がなんかあげると、オーケー（OK）、オーケー（OK）といい、中身も見ず拍子抜けしました。

次は、身体検査です。シーツがかけてある中で行われ、どんなことをされてもじっとしていてくださいと、言われました。学生だったけど、別にそんなに怖くなかった。「怖かったの」と聞く人には、「どうもない、どうもない、大丈夫よ」とこたえたら、みんな安心されたみたいでした。

検査終了後、引き揚げ船に乗船して、釜山港から福岡へ渡りました。引き揚げ船は、舞鶴港と福岡港に行く船、両方があったのですが、私たちは、父の判断で、福岡から汽車で京都へ行くことになりました。

## 福岡から京都へ

11時30分に福岡に着き、12時に汽車は出発しました。



無蓋車

無蓋車（屋根がない貨物車）に一杯の人が乗っており、これで帰らないと京都に着くには大変です。母もお尻からポオンとほうり上げてもらい、私たちも跨いで乗りました。毛布をかぶって寝ていましたが、関門トンネルは、静かでした。広島の手前で、広島はすごい爆弾が落ちている（原爆）ところだから、目がみえなくなる（風評）からと、絶対に頭を出さ

ないでと言われ、みんな帽子を深く被ったり、毛布をかぶっていました。

屋根のない材木を積む汽車だったので、私は、広島に着くと、毛布を被ったまま立って、こっそりと周りの景色をのぞき見しました。そこは、一面焼け野原でした。広島駅は、瓦礫だらけで、電信棒（電柱）みたいなのが時々みえるぐらいで、そらすごかったです。覗いたら目がみえなくなると、周りの人から言われていましたが、2、3人は興味深々（きょうみしんしん）で被っていた毛布から覗いていました。

京都に着いたのは、夜の8時でした。前日の昼に汽車に乗って次の日の夜の8時に到着しました。汽車がとにかく動かない。汽車が材木の屋根のない貨車で、煙で真っ黒けになっている。みんなが黒くなっているから、何とも思っただけでなかった。「そこに洗面所があるから、そこに行って顔を洗いなさい。」と父に言われました。また、父は「トイレがあるから、正面玄関の横にある。」とも言いました。姉の顔を触ると指が黒くなり、「お姉ちゃんの顔、なんかすごいよ」と、そこで、煤（すす）で真っ黒になっているのがわかり、父に言われて、そこで顔を洗いました。

案内所にいる女性の服装が、パンパン<sup>※6</sup>（俗語：私娼）みたいな派手なドレスで着飾っていた。外人と手を組んで歩いている姿を見て、私は「くそつたれ」と思いました。「私らこんなに苦労して帰ってきてなのに、何よ、こんな外人とペラペラ喋って。」と複雑な気持ちになりました。

私は、派手な女性に「えらそうに。何よその態度は」と思わず言ってしまいました。そしたら、「ごめんね」と言われた。派手な女の人が、まさか、「ごめんね」と言うと思っていなかったもので、こんなこと言ったらだめだと思っておとなしくすることにしました。

京都駅で荷物のリュックを預けました。夜8時に京都駅の前に荷物を預かる人がたくさんいて、買い出しの人が預けたりしていました。私たちの7つあったリュックの内、一番下の妹の救急袋とおやつが入ったリュックのみ残して、全部預け、2日後にリヤカーを借りて京都駅まで歩いて取りに行くと、リュックサックの中身が半分になっていました。

京都駅から丹波橋経由で八幡に帰ってきました。引き揚げの時から数えて、8日間かかりました。

## 終戦を迎えて ーロシア（ソビエト）人からの情報ー

朝鮮では、ロシア人のスパイ？が多くいたのではないかと思います。

私たちの住んでいる仁川（インチョン）は、大きな事務所や会社があり、ロシアの人たちが沢山おられ、服屋さんをしている方がたくさんいました。

ロシア人の方々は、割と我が家に入出入りされていて、様々な情報を教えてく

れました。「今、日本紙幣に替えるのはダメですよ。」とか、「朝鮮紙幣でも日本に持って帰れるよ」、「朝鮮紙幣でなくて、早く日本紙幣に替えんと、替えることができませんよ」とか、わざわざ、教えに来てくれます。それから、「何月の何日になったら、引き揚げが始まりますよ」との情報を提供してくれます。「もしかしたら、火事があるかもしれませんよ」と言われた時、実際に火事があって電気会社が燃えたことを記憶しています。

ロシア人の方に、みんな情報が入っていたみたいです。終戦になってからでしたけどね。

### 終戦を迎えて（アメリカ兵と）

終戦後、10日経って、アメリカ兵が朝鮮に上陸してきました。

「日本人の兵隊さんは、かなり外地で、人を泣かしてきたから、終戦になって、米兵が上陸してきたら、娘さんは怖い目にあうから家からでたらいけませんと言われ、また、20歳過ぎたお嬢さんは何人か出してください。」と言われました。

「何をするの」と聞くと、アメリカ兵のコンパニオンにするからとのことでした。私の姉は18歳で、まだ学校に行っていて、20歳と違うから、「行けません」と言って断りました。周りの娘さんも怖いから、みんな断るのです。そして、どこの町内も娘さんがいないことになってしまった。

私の家は畳屋で、看板があります。アメリカ人のMPが畳屋は珍しがって7～8人、多い時は10人ぐらい家にやって来ました。米兵たちは、畳を作っているところを、「どおっ」と座って見えています。私たちも見慣れてきて、悪いこともされないし、だんだん慣れてきました。

米兵から「お土産をたくさん持ってきたから、子どもたちをみんな呼んでください」と言われポケットから、チューインガムやチョコレートを一杯出して、「プリーズ」「プリーズ」と言ってお菓子をくれました。

私が学校で習った英語を片言で喋るから通訳と思われていました。楽しかったですよ。あのときは。母が、お盆を出して置くと、お盆一杯にお菓子を入れてくれて、夕方に近所の子どもたちにあげました。そんな日が毎日続いていました。父の畳屋のおかげでね。終戦後は怖くはなく、これまでと全然違う世界に変わっていきました。

### 日本での生活

朝鮮から自宅1軒まるごと、そのままおいて、お金だけ持って日本に帰ってきました。

当時のお米は、普通のお米が5円で1升と高かった。良いお米は7円でした。

引き揚げの際、7円の上白された良いお米を持って、道中炊いてもらうのに出しました。釜山のお寺では、庭にブロックやレンガが積んでいて、お釜も貸してくれたから、そこでご飯を炊きました。引き揚げ途中でも食べましたが、日本に持って帰ったお米は7升ぐらいありました。

引き揚げてきて、一番上の兄のところまで世話になったのですが、日本では、お米をあまり食べられなかったのが、持ち帰った米を欲しがりましたよ。ごはんは、米に野菜をまぜて炊いていました。大根とかお芋さんとか入れて炊いていました。だから、日本の方が大変な生活だったんでしょうかね。私たちの方が割に幸せでした。

## 朝鮮での思い出

私が朝鮮にいた頃は、ナイチンゲールにあこがれていました。女学校の3年で看護師になる試験を受けましたが、身長が150センチ以上なく、落とされてしまいました。149センチしかなかった。

不合格の通知がきて10日したら終戦になりました。看護実習も、国立の大きな病院で実習していました。海が近く、船員が船舶で人が送ってきます。国立とか個人病院の外科とかにたくさん入院されていました。

けがの治療の実習に良くいきました。貫通銃創の傷穴が開いていて膿がでていたりしている。管を入れて膿を出すようなことをしました。いろいろありました。何の自慢もないけど、憧れていた看護師実習は一つも怖いことはありませんでした。だから、国立での実習で子宮がんの大手術や胃がん、乳がんの手術、蓄膿の手術、脳の手術、腸ねん転の手術、みんな看護師さんの横について実習生が見学します。ライトが点いたら、実習生はみんな真っ青になり、しばらくがちがちと震えています。私は、興味津々だったので、いつも最後まで残っていました。私は何でもやりたくて、だから看護師になりたかったけど身長が足りず、看護師にはなれませんでした。

女学校では、ヨモギを山に採りにいっていました。ヨモギは染料になるから、学校の道具の小屋に入れて蒸します。1年生が3組あって60人。4年生まで入れると180人がヨモギを採りにいくから、道具の小屋はヨモギでいっぱいになっていました。終戦1週間前を見るとそれがそのままおいてあって、どうなったかわかりません。

また、1年生は講堂にはいって馬具作業がありました。天井から馬のバンドを編んだりしていました。

2年生は兵隊さんのワイシャツのボタン付け、3~4年生は仕立てをしていました。みんな学年ごとに勤労奉仕をさせられていました。戦争も終盤になると勉強どころでなかった。終戦2年前くらいから勤労奉仕していたと思います。

学校で軍服を縫い、ミシンかけをしていました。私はボタン付け専門で、慣れた人がしていました。ちぎれないよう余裕をつくっていました。戦時中は慰問袋も作りました。

朝鮮では、日本人で一つのまちが作られ、支那人（中国人）だけでまちが形成されていました。だから朝鮮で30年も40年も過ごしている人ばかりでした。だから私の女学校も私らが34回の卒業です。みんな朝鮮で生まれた人が多く、裕福でした。朝鮮の人々を使用人として下働きに使っていて、きつく使っている人は憎まれている人もありました。

私の家では、朝鮮人のおじさんとおばさん夫婦が来ており、おじさんは父の昼の仕事、おばさんは母が喘息で弱かったので、食べることと、洗濯、アイロンを当てたりする仕事をし、夜になったら家に帰る日常でした。おじさんはソバン<sup>※7</sup>って呼んでいて、おばさんはオモニ<sup>※8</sup>って呼んでいました。私たちは、「オモニ」、「オモニ」ってみんながおばさんに甘えていました。家族同様に扱っており、引き揚げの時に、その人に自宅を譲って、日本に帰ってきました。

## 八幡での生活

八幡での生活は大変でした。

私の父の実家は、父の兄の家族が住んでいて大工でした。おじいさんとおばあさんは、別の場所を借りて住んでいました。

私の家族は、帰国後は、父の兄の家族が住む実家に住まわせてもらいました。実家では、父親の兄さんの息子さん家族もいて、子どもがたくさんいて、ぐちゃぐちゃな生活をされていたみたいでした。子どもが多くて、そこのお父さんが働かなかったので、大変な生活をされていたところに、私たち家族が帰ってきたのです。だから、私らのいところにあたる人のところには住めず、父親の兄にあたるおじさんの家に世話になりました。そこに世話になりましたが、年寄2人が暮らして食べ物もそんなになかったと思います。だから、私ら家族がお米を持って帰ってきたのが珍しくて、お米を欲しがっていたような感じでした。

そこには、長く世話にはなれないから、母が近くの農家にいろいろと分けてもらいに行っていました。農家の方もですが、八幡の方はいい人がたくさんいました。じゃがいもが採れたら、分けていただき、手籠に一杯くれた人もいました。それが食事でした。母は、持って帰った着物をお米と交換してもらいに農家へでかけ、お米はなかったけど、かき餅じゃなくてあられ、細く切っている生のものをいただきました。農家の方が持てないほどくれたと、母は喜んでいました。それを炒って私たちに食べさせてくれました。農家、様様（さまさま）でした。こんな状態でしたから、食べ物には不自由しました。

引き揚げ後、父は自営業でしたが、働かなければなりません。丹波橋に職業

安定所があると聞いて、1 カ月後に生活ができないからと職探しにいきました。父は畳屋でしたから、リノリウム<sup>※9</sup>を張るのと畳とがあるからと、大阪の日本橋にリノリウムの会社があると紹介してもらいました。

1日7円で、1カ月休まず、会社へ行きました。「初めてのお父さんの給料」やと母は喜んで神棚に給料を供えていました。私は、生活苦やのに、いつまで供えているのと、その時思いました。2カ月目は、父が真面目に行くので一日7円が、10円になりました。すごく生活が助かりました。

父が、会社でリノリウムを包んでいる油紙みたいな大きな白い紙を、家に持って帰ってきて、母がたたんで切り、ティッシュ代わりにして、物々交換に使っていました。当時は紙がなく、みんな新聞でしたから。その白い紙が好評で農家に持っていったら、米はないけど家にあるものをいただきました。それで私は生き延びました。

ジャガイモは、ご飯の代わりに1週間食べた。茶碗に一杯。母の茶碗の中の白いきれいな芋を自分の青い芋と黙って交換したりした。母は、その青い芋を、黙って塩をつけて食べていました。今、思うとえげつないことをしていた。私ら、苦しんでいる母を助けたのではなく自分さえ良かったらと思っていた。母にはかわいそうなことをしたなと思います。母が「いいよ、食べたらいいいよ」と言ったら、当たり前のように思っていました。母に、水臭い苦みのある芋を食べさせて、私らはいいい芋を食べました。私も年を取ってきて、「ああ、すごく親不孝したなあ」と反省しています。

食べる物には、不自由しましたが、農家の人には救われました。いよいよ炊きもの（煮炊きするかまどにくべる燃料）がないという時に、松葉、こくばかき（扱葉掻）<sup>※10</sup>って言ってね。松葉をかきにいくのです。かごに松葉を入れて帰ります。また、竹藪の土手に長い竹が残っていて、その竹の株を切って鉋（なた）で「ぽん」としたら割れます。私は行ったことはなかったですが。それを持って帰って、乾かして炊きものにしていました。当時は今のマッチとは異なり、縁（へり）に硫黄がついてるマッチを使っていました。

京都市内の新町に引き揚げた人が、家族と連絡が取れず、私の家を訪ねてきました。京都市内は家事をするのに必要な炊きつけに使う薪もなく、家に干してあった松葉を2つ風呂敷に包んで持って帰られました。引揚者同士の助け合いです。引揚された方は、もう涙こぼすように喜んで帰られました。お土産なんて何もないけど、そんなものがお土産でした。

私の家には、たくさんの引き揚げ者が訪ねてきました。「引き揚げどうでした。うちはこんな苦しいですけど。」と話を切り出すと、私らより、後から引き揚げた人は、もっと苦しまれていました。北朝鮮からもどんどん逃げるように日本に引き揚げてきました。

真っ黒けの顔して、ドロドロになって、我が家に入ってきたら倒れられた。「どこから引き揚げて来たの」と言うと、「スイエン（中国北部）から」って言われました。スイエンから命からがら逃げてきて、夜通し逃げてきて、私の家に入ったとたん、「ぼてっ」と倒れて立つことができません。

行くところがない人が何人も家にきて、助けてあげました。2 か月ほどでしたが、北朝鮮からたくさん逃げて引き揚げてこられました。私たちは朝鮮半島の37 度線より南に住んでいたのもまだ良かったですが、38 度線より北におられた人は大変でした。みんな苦しんでおられました。とにかく 37 度線の土地を踏まないと、自分らの命がなくなるので必死で逃げてこられたようです。

## 両親のこと

母は大変でした。喘息の持病があって、慌てさせると「はひっ、はひっ」って咳がでます。背中をさすって、「母ちゃんしっかりしなさいよ」、「頑張らなあかんよ」と私と妹の 2 人で手を取りながら走りました。母は、足を引き摺りながら、ヨロヨロしながら歩いていたのを記憶しています。

今から思うと、あの時代で、あの年齢で、あんなことが起こったらくじけてしまうと思います。母は引き揚げてきて、昭和 34 年（1959）に 61 歳で亡くなりました。40 歳代で一軒の家をみんな棄てて、引き揚げてきました。人生でも悲しかったと思います。父も母も、一言も文句を言いませんでした。くよくよ思ったら、「上を見んと、下を見て感謝しなさい。」と、よく言われてきました。当時は、「何で下見て、感謝しなあかんねん」と思っていました。「私より困っている人がいると思えば、自分は幸せに思うから困った人のことは何でも助けられる」って言われていました。「上には、自分が頑張ったらなんぼでもなれる」と、それで、「下っていうのは、人に見下げられたら、自分が悲観するから落ち目になり、だんだん寂しい気持ちになる」そういう人にやさしい言葉を贈ると、一時の苦しみに悲観しているけど、支える言葉で人間はよくなると、言われていました。私は、その言葉を今も大事にしており、今も福祉の仕事をしています。

.....  
(※1) 仁川（インチョン） 明治 9 年（1876）の日朝修好条規によって開港された、仁川港を中心に発展した韓国北西部の都市。

(※2) 引き揚げ 日本の植民地（海外領土）や占領地にいた日本人が、昭和 20 年（1945）8 月 15 日の敗戦によって帰国してきたことをいう。

(※3) セル 梳毛（そもう）織物の一種。経糸・緯糸に細い梳毛糸を使って、平織りで織られた毛織物のこと。

- (※4) コマブソ (고맙소) ありがとうの意味。
- (※5) MP (正式名称 military police) 米国陸軍憲兵隊のこと。主な任務は、陸軍部隊内の保安、警備である。
- (※6) パンパン 敗戦後の日本で、主として占領軍兵士を相手にした街頭の私娼。
- (※7) ソバン 朝鮮語「婿」
- (※8) オモニ 朝鮮語「母」、「母親」
- (※9) リノリウム 床はり用加工材
- (※10) こくばかき (扱葉掻) こくばの扱くというのは、木の枝から葉を取ることで、稲の穂から粃を取るのを稲扱ぎというのと同じです。このこくばについてですが、特に松葉の落ちたものをこくばと呼んで珍重し、それを掻き集めて束ねることをこくば掻きと呼んでいました。普通の落ち葉は一瞬に燃え尽きるが、松葉は脂を多く含んでいて火力が強く、火持ちも良かったです。このこくば掻きは主に女・子どもの仕事とされており、昭和20年代までは、田舎のどの家庭でもこのこくばは必要不可欠の燃料で、ご飯炊きのかまどから、七輪の炭火おこしにまで毎日使われていた。(昭和の記憶より)

## 戦時中・戦後の思い出

高井 哲雄（たかい てつお）

昭和 12 年（1927）4 月 19 日生まれ

上津屋浜垣内在住

### 国民学校と集団疎開

終戦が近い頃は、国民学校 2 年生の時でした。

家の金属類やお寺の鐘まで政府に供出しなければならず、学生服のボタンも陶器製のボタンに変わりました。

国民学校初等科（6 年）卒業後、満州開拓義勇軍（満蒙開拓青少年義勇軍<sup>※1</sup>）に志願した丸刈りの高等科 2 年生が、朝礼台に立って、「満州開拓に行きます」と朝の朝礼で挨拶していたことを覚えています。

すべてが戦争の精神を叩き込まれた時代でした。

私の地域では、京都市から 4～5 校、4 年生以上の生徒が集団疎開<sup>※2</sup>されました。

上津屋地区には、お寺が 3 つあり、100 人以上が分散して疎開されていました。三が寺は、便所が足りないので、急きょ、お寺の境内に臨時の便所（掘立小屋）<sup>※3</sup>や足洗い場を増設するなどの対応をされました。

後でわかった話ですが、この疎開者の中に腹話術師の川上のぼる<sup>※4</sup>さんや俳優の団令子<sup>※5</sup>さんがおられたことが、後ほど、疎開のお礼に来られたことからわかりました。

八幡市での疎開は 4～5 か所あり、西岩田地区は正覚寺<sup>※6</sup>が疎開地でした。

疎開の生徒たちは、みんな空腹だったせいか近くの農家でおやつなどの物乞いをされており、私の実家にも物乞いに来られていたことを覚えています。

戦時中は、さまざまなことで苦労しました。朝起きて、空を見上げると米軍の飛行機が飛んでくるのは日常茶飯事のことでした。

### B29 の空爆でのこと

大阪の空襲では、毎晩のように大阪の空が真っ赤に染まっていました。空襲の翌朝は、煙で夜のように暗く、焼けた新聞紙等が舞っていました。

空襲に向かう B29 爆撃機からは、キラキラとした電波妨害のためのジュラルミン（テープ状の固まり）が投下され、このジュラルミンのテープで農作物の害鳥の脅しに使っていました。

また、六角柱状の不発焼夷弾<sup>※7</sup>の束も投下され、発火を恐れた近所の人たちが、近くの川に浸けていたことを覚えています。

大阪の無造作に爆撃する空襲と異なり、焼夷弾が外れたのか何かで、こちらに落ちて来たものと思っています。

B29 爆撃機は、高射砲では撃ち落とせず、日本の戦闘機が接近して、急所に弾があたり、大阪方面から火を吹きながらこちらに飛んできたことがあります。私は、それを見て「落ちるで、落ちるで」、「あっ羽が落ちたわ」なんて言っていました。

燃えながら飛んできた 1 機は、宇治の伊勢田（宇治市伊勢田町）に墜落し、もう 1 機は京田辺の木津川の河川敷に墜落しました。

伊勢田には親戚がいるので、姉と一緒に伊勢田まで見に行きました。そこは田んぼで、死亡したアメリカ兵が野焼きをされている最中でした。私は、ばらばらになった機体の金具を持ち帰ったことを覚えています。

私は、野焼きを初めて見て、「戦場ではこんな臭いがしているんだろう」と、何とも言えない人間の焼いた臭いでした。死亡したアメリカ兵を、そのままにはできず、燃料がない中で、周りの人が燃える材木を集めて、護摩木を燃やすように組んで、燃やしていたのを、今でも覚えています。

## 水泳中に機銃掃射

私は、夏になると上級生に誘われ、よく木津川へ泳ぎにいきました。みんなは、毎日のように自宅の井戸で冷やしているトマトやスイカ、マッカ<sup>※8</sup>などを持参し、私はいつも冷やしたトマトを持って木津川の河原で泳いでいました。

ある時、警戒警報のサイレンが鳴ったので上級生から早く家に帰るように言われ、急いで川からでる途中、すぐに空襲警報に変わりました。

城陽から宇治田原方面の山の向こう、南東の空からアメリカの艦載機が飛んできました。川向うの久御山町佐山にある飛行場そばの格納庫（現在の日産自動車学園辺り）に、後ろからパッと白い煙を出して急降下して爆弾を投下後すぐに上昇しました。そして、旋回するときに、私たちに狙いました。

上級生は、足が早いので何人かは河川敷の茶畑に逃げ込みましたが、私は間に合わず、白いパンツが目立つため、裸になってパンツを腹の下に入れ、熱い砂に腹ばいになって伏せました。

艦載機は、河原で腹ばいになっている私たちに向かって、「ダダダダダッ」と機銃掃射し、川面にはいくつもの水柱があがりました。後で聞いた話ですが、茶畑は蚊が多く、そこに逃げ込んだ上級生は、蚊を叩くと音が聞こえるから「叩くな」と言うことになり、蚊に刺されるままだったそうです。

幸い、機銃掃射は当たらず、九死に一生を得たことを今でも思い出します。

## 戦時中の生活と思い出

食糧は、実家は農家でありながら、育てた米はすべて供出しており、うどんを食べていました。うどんだけでなく、芋づるも食べていました。上の葉っぱを取って茎の部分、茹みたいな皮を剥いて食べていました。

今思えば全部供出しなくて隠していたら良かったと思いましたが、そうはいかなかったみたいでした。小麦粉も供出していて、家で食べるのは、府道の道端の端っこを開墾してネギや大豆を作っていました。埃だらけのネギで、葉っぱを取って食べていました。

当時は、米をつくらしているのに「何でうどんを食べなあかんね」と思っていました。育てた作物は、全部、お上（政府）に供出しなければなりません。戦中戦後の時代でお茶も作っていました。

父は、作物を作るのにも肥料がなく、堆肥をもらいに毎日のように早朝 2 時か 3 時に起きてリヤカー<sup>※9</sup>で、京都市内へ肥え（人糞＝肥料）取りに出かけていました。



リヤカー

私が 1 年生の時、先生に頼んで兄（3 年）と一緒に、ゆで卵を 1 個ずつもって学校の授業を 2 時間で早退して父親を迎えに行っていました。

流れ橋から木津川堤防を御幸橋、旧一号線、淀、大手筋、鳥羽大橋まで歩き、鳥羽大橋で父親が帰ってくるのを待ちます。

父が自転車にリヤカーを連結して肥桶 8 杯積んで帰ってきます。兄と私はリヤカーの前を左右に分かれロープを引きます。

父は自転車に乗るため、私たちは小走りでリヤカーを引っ張り、家まで帰っていました。

.....

(※1) 満蒙開拓青少年義勇軍（まんもうかいたくせいしょうねんぎゆうぐん） 青少年を満洲移民政策に動員するために設置された移民団。昭和 13 年（1938）に創設された。農家の二男、三男を中心とする数え年 16 歳から 19 歳の青少年を訓練して移民団に組織し、主として満州北部に入植させた。

(※2) 集団疎開（しゅうだんそかい） 集団で疎開すること。第二次大戦中の学童疎開を言うことが多い。昭和 20 年（1945）4 月、京都市内豊園国民学校生徒 3 年から 6 年の 130 余名が、都々城村上津屋の善照寺、光瀬寺、専淋寺に学童疎開した（『八幡市誌』第 3 巻より）

(※3) 掘って建て小屋（ほったてごや）とは、礎石などを用いず、柱を直接土中に埋め込んで建てる小屋である。転じて、粗末な家に対して使われる表現となった

(※4) 川上のぼる 日本の腹話術師の草分けで、NPO 法人「日本腹話術師協会」名誉会長。故人

(※5) 団 令子（だん れいこ） 東宝の看板女優。京都府出身。故人

(※6) 正覚寺（しょうかくじ）京都市八幡市岩田茶屋ノ前 13-2 浄土真宗本願寺派

- (※7) 焼夷弾(しょういだん) 家屋の焼失や火災による人員殺傷の目的で使用される砲弾や爆弾のこと。アメリカ軍は、木造建築の多い日本での効果を認め、3月以降の日本空襲では、M69 焼夷弾を多用した。実際には38発のM69をひとまとめにしたE46 集束焼夷弾として投下され、一定の高度で分解するようになっていた。証言の中で、六角柱状の不発の焼夷弾の束とはこれを指すと思われる。
- (※8) マッカ マクワウリ(真桑瓜)のこと。ウリ科キュウリ属のつる性一年草、メロンの一変種で果実は食用する。南アジア原産。季語は夏。
- (※9) リヤカーは、金属製のパイプと空気入りタイヤで構成された2輪の荷車である。日本では軽車両としての公道利用が認められており、人もしくは自転車、オートバイによって牽引して使われている。

## 捕虜生活

渡邊 實（わたなべ みのる）

大正 12 年（1923）10 月 23 日生まれ

男山石城在住

私は、大正 12 年（1923）に大阪市住吉区（現在阿倍野区）に宮大工の一人息子として生まれました。

昭和 19 年（1944）21 歳の時に、召集令状で徴兵されました。

当時、大阪駅東口ガード下に早朝集合して「いよいよお国のために」と出発。その日のうちに博多に集結し、民家に一泊、日本では最後の夜になりました。

着任地は、旧満州国北東部、松花江（ショウカコウ）<sup>\*1</sup>の沿岸にあった佳木斯（チャムス）市という町で編成された、満州国独立工兵第 1893 部隊でした。そこは冬季に零下何十度、夏季は 40 度近くになる地で、半年間教育期間として、みっちり基本を叩きこまれました（今の若い人たちには耐えられるだろうか？）。

敵前上陸用鉄船<sup>\*2</sup>（約 500 kg）を 10 人で河原から川岸まで約 150 メートルを担いで入水させる渡河作戦訓練は、船の重みが肩に食い込み腫れ上がります。そこで、腰砕けになれば拷問のごとくムチが飛びます。

乗船すれば慣れない櫓（ろかい）<sup>\*3</sup>で手はマメだらけ赤く腫れ上がっても我慢の演習でした。

橋梁架設の杭打ち演習では、重い四手のタコ（木製の杭打ち器）を使い 2 人協力しての作業です。呼吸が合わなければ、そのタコで頭を打ち転倒し、上官のムチが飛ぶ、そんな毎日が続きました。

昭和 19 年（1944）の秋、教育期間が終わると、特別教育部隊（この隊は後程、日本国内で幹部教育のため帰国、その途中、輸送船は敵魚雷を受けてごう沈されました）と残留教育部隊（新兵教育）に分けられましたが、私は、残留教育部隊に配属されました。

その後、戦局は激化の一途をたどり、日本軍は、国境線の第一線にいた本隊は撤退を余儀なくされ、撤退中に中隊長の「敵機来襲！全員退避！」の大声が聞こえました。

### 戦友が撃たれる

その時、隣の戦友が「あっ！やられた！」

横を見ると右足から血が噴いています。

「救急班、早く来てくれ!」、 「戦傷者だ!早く!早く!」 と私は怒鳴りました。間一髪でしたが、私は傍らの電柱が盾となり難を逃れました。

敵の追撃を避けながら、満足な戦闘もせず、撤退中、民家の空き家から衣類や食べ物の残り物を拾いつつ、飢えと着衣を補う惨めな軍人でした。

私は、浴衣の切れ端でフンドシを作り、下着の代わりにして着用して戦友に笑われたこともありました。

## 終戦! 地獄の捕虜生活

昭和 20 年 (1945) 8 月 15 日終戦、私たちは林口 (りんこう) ※<sup>4</sup> で武装解除となり、山と積まれた軍刀や銃が目の前で焼かれ、生きて汚名の恥ずかし目を受けたくなかったのか近くの山中で自決した一部の兵士もいました。

何故、生きなかったのか、何故、もう少し頑張れなかったのかと残念で胸が詰まりました。

私たちは、昭和 20 年 (1945) 9 月にソ連 (ロシア) の捕虜となり、「ウオロシロフ」 ※<sup>5</sup> という田舎町の収容所に入所させられました。

これからが地獄の生活の始まりです。

林口から出発した私たちは、1 個大隊千人単位で 5 個大隊が 1 連隊となって収容所まで約 250 キロを 10 日間ぐらいかかったか、ソ連 (ロシア) の 9 月は、まだ暑く、汗まみれの衣服は着替えもなく、破れた軍靴からは親指が頭を出していました。

夜は野営で、道端の木陰かボロ小屋が見えれば幸いで仮眠しました。雨の日も歩き、逃亡した者もいましたが、恐らく逃げ切れてはいないと思います。食料は、軍隊を出るときの携帯食だけで 2~3 日もすればなくなりました。

その後は、ソ連から支給される厚さ 2 センチほどの黒パンが 1 日の食糧でした。

途中の道端では、戦いの跡が生々しく残っていました。

川には、多くの死体が浮かんでいましたが、誰も近づこうとしないまま黙々と歩きました。

遺族の事とか、遺品を持って帰ろうとか、その様な事は頭には浮かんできませんでした。

私たちは、空腹を満たすのにその川のカエルを食べ、へビは「かば焼き」にしました。

眼前に古びた小さな駅が見え、そこから貨車に乗車し ※<sup>6</sup>、車内はぎゅうぎゅう詰で座ったまま、便は垂れ流し、悪臭で気が遠くなりそうになる中を 2~3 日は乗ったでしょうか。

貨車が到着したのは、ソ連のウオロシロフでした。

9月中旬のソ連は大変暑かったことを記憶しています。

### シベリア捕虜収容所で

収容所の周囲は、有刺鉄線が張り巡らされ、四隅に監視用の高い櫓があり四六時中、狙撃兵が監視していて、近づけば逃亡者とみなして発砲されました。

収容宿舎の外壁は、分厚い板張りで冬の雪に耐えられるようになっていました。内部は土間で上下二段になった（上に2人下に2人）木製のトンボ寝台が両方の壁際に2列10台、入口は1か所で土間の中央にペチカがありました。

夜は防寒外套（ぼうかんがいとう）を着たまま、毛布1枚被って折り重なるように寝ました。

寝台の上段と下段では温度差があり、上段の者は下段の者に夜中に毛布を貸したりして、戦友を気遣う場面もありましたが、零下30度の酷寒のシベリアの夜は地獄の世界でした。

夜が明ければ7時に点呼を受けるため集合整列させられ、早朝の寒さは骨の芯まで身にしみました。

ソ連兵の数取りは弱くて、何度も繰り返して1回の点呼に3時間以上かかることがありました。

うっかり手袋を忘れれば指先が凍傷になり手当を受けるのですが、薬が少なく満足な治療もできず長い間苦しむ者も少なくありませんでした。

点呼が終わり、部屋に戻り朝食となりますが、2人の当番が天秤棒にバツカン※7という樽の入れ物を提げて、パンと汁物を持ち帰りますが、途中で少なくなることがあります。それは、当番が盗むのですが、すぐに判明して、その班全員が2～3日の食事抜きを刑を受けます。

食事の配分も厳重で、当番は土間に広げた軍用携帯テントの上に並べたパンを木製手作りものさしと包丁で切って分配をするほどの厳重さでした。

少しでも不公平があり、少なければ指摘され、全員の了解のもとで万遍なく分配するのが日常でした。

私たちの中には、教授や村長、僧侶もいましたが、みんな同じ獣の目をしていてその分配を凝視します。少しでも不分配があると異議を申し立てるほど過酷でした。それでも食事は1日の内で最高の時間でした。

私たちは、強制労働を要求され、場内の清掃のような軽作業から荷物の運搬とかの重労働がありました。

ソ連流の「働かざる者は食うべからず」で栄養失調寸前の私たちは、ノルマの上がないグループにはパンを少なくされました。

そのうち段々と体力が低下し、ノルマ達成が困難となり、パンの配給も少なくなり、栄養失調で病人が増え、益々食事情が悪くなる悪循環で死人が多数

出るようになりました。

## 隣の戦友が帰らぬ人に

私の隣に寝ていた戦友も、栄養失調からコレラに罹り 1 週間も食事がとれない状態で床に臥せる日々が続きました。

会話もできない日が続く中、ある朝目が覚めて、ふと隣の戦友の異常を感じ、声をかけましたが返事がありません。

「おい！」「おい！」と声を掛けましたが返事がない。死んでいます。

苦しんだ様子もなく天国に逝った安らかな姿は、生きる力を使い果たしたのでしょう。栄養失調で骨と皮だけの痩せ細った遺体でした。

次は自分の番かと不安と恐怖で涙がとまりませんでした。私は、心から彼の冥福を祈りました。

入所 2 カ月は労働らしい労働もなく、最低の食料しか支給されず体力は段々低下していきました。

寒い冬が迫ってくる時期は、屋内の軽作業でも苦しくなりました。

月 1 回の蒸気浴場（サウナ）で体を洗って、着用していた衣服は熱湯消毒され、わが分身の「シラミ君」と決別しますが、袖は卵で真っ白で 10 日もすると増えてきます。

労働は、屋内労働（体力の貧弱な者が就業）と屋外労働（多少の重労働にも耐える者）に分けられ、屋内労働では、便所掃除、コウリャン<sup>\*8</sup>の糞摺り、炊事場の手伝い、木工作业などの軽作業でした。

屋外労働は、食糧の受領、農作業、荷物運び、レンガブロックの製造、炭鋳作業などがあり、特に炭鋳作業は、丈夫な体力に自信のある者たちが選ばれ、苛酷な労働でした。しかし、この作業は収容所でのメインの作業でもありました。作業は 3 交代制で一作業が 8 時間制で、炭鋳まで歩いて小一時間ほどかかりました。

零下 3～40℃の極寒の中、布きれを巻き、靴下の代わりにしてゴムの短靴は耐えるに忍ばず、トボトボと歩き、気力だけで両足が動いていました。止まれば凍傷になります。

みんな無口でただ黙々と歩きました。ようやく炭鋳に着けば、カンテラを提げて約 100 メートル地下に徒歩で降ります。

坑内は暖かく一時はホッとしますが、掘削はダイナマイトを使った発破（爆破作業）です。

最初は不慣れでノルマも上がらず、坑内で駆動している 1 台のトロッコに子犬の頭ほどの石炭を、手で 1 個 1 個積み込むのが精いっぱいでした。

そのうち要領も得て、みんな協力してスコップを使ってトロッコに積み込

み、早い時間にノルマを達成し、成績を上げたことでパンの量も増えました。

## 作業は危険が一杯

発破作業後、現場監督の指示で坑内の待避所で数分間、退避し再び作業を開始すべく現場へ向かうのですが、監督の指示が5秒間違えば、落盤でペッシャンコになる九死に一生を得た事もありました。

地上にはトロッコを巻き上げる小屋があり、運転する者は民間人ですが巻き上げ機は、メイドインジャパンの銘板が打たれた日本製でした。

その他、屋外作業の中で比較的軽い食糧受理作業は、ポニー（小馬）に台車を引かせて食糧（コウリャンパンとその他スープ用の乾燥野菜など）を受け取りに指定受領所に行きます。

収容所を出発する前には、霊柩車の代わりとなり前夜に亡くなった遺体を埋葬するために、その台車に乗せて数キロ先の高地に運び、カチカチに凍った大地を半日がかりで2〜3センチ位しか掘れず、数週間もかかってようやく埋葬します。ミイラ化した親指を遺品に、パンと一緒に持って帰るのが日課でした。

翌年の春、雪解けが近づいて、少し暖かくなる頃、ふと遙か彼方の丘を見ると、白い墓標が点々と見えてましたが、その時は不思議と何の悲しみも沸きませんでした。

今から思うと知覚神経が麻痺して、頭の芯まで栄養失調になっていたかもしれません。

9月の入所時に1千人いた私たちは、この時期は300人が残っただけでした。

ソ連側もあまりにも死者が増加するため、「働かざる者食うべからず」の鉄則を軟化し、3カ月ほど休養がありました。

その結果、体力は徐々に回復し、軽い作業に出られるようになりました。

農作業のホルホーズ（集団農場）でのジャガイモ掘りは、屋外労働の中でも軽い作業であったが、それでも衰弱した体は、結構苦しく感じました。

昼食に現地の農夫が作ってくれるオートミルは何杯もお代わりが出来て、普段満たされぬ食欲は堰を切ったように貪り食い、我先にと食べる姿は、飢えた野良犬そのものでした。

その中でも心が休まるひとときもありました。

ある日、木工作业で屋外に出た時、車でも撥ねられたのか鶏の死骸を見つけました。

監視兵の了解をとり、昼食時に鶏をさばいて私たちの手料理でスープにして食べ、久しぶりの美食で大満足でした。苦しい厳しい生活の中で忘れられない1日でした。

農民は個人的には心の優しい市民ではあったのかもしれませんが。

また、こんな事がありました。作業場に行く途中の農家の豚小屋に、出来立ての湯気の上がった豚の餌になる屑芋を見つけ、監視兵の許可をとって、それを横取りしました。豚はブーブー泣いて怒っていましたが、私たちは、恥の外聞もなく「ごちそうさん」でした。

## やっとの帰還

昭和 22 年 (1947) 4 月、いよいよ待ちに待った「東京ダモイ」(ダモイ＝帰還)。内地への帰還が決まりました。

収容所内は喜びに沸きかえり、「万歳！万歳！」の声。

やっとなら帰還できるのかと出発前夜は、みんな寝られなかったのか目が真っ赤でした。

当日の朝、全員集合し、みんなの顔は、赤みがさして生き生きとし、普段の病人顔ではなく、生まれ変わったような元気な顔は、今も脳裏に残っています。

帰還港のナホトカ<sup>※9</sup>までの足取りは軽くとは言えないものの、蓄えた体力を力いっぱい振り絞り、全員事故なく無事に港に着きました。



現在のナホトカ湾

出港まで数日あり、その間に大きな事件がありました。

当時 4 月と言えばまだシベリアは寒くて、ある部隊の一部の兵隊が待機宿泊所の仮設トイレの板壁を剥いで、たき火にしたのを監視兵に見つかり、その部隊全員が、元の収容所へ戻されるという事件でした。

たった数人の違反者のために何千人もの仲間が、また苦しまなくてはならない目にあいました。

港での待機期間は何日位であったのか忘れましたが、10 日近くあったように思います。

「あと何日で日本に着くのか」。毎日、時間が長く感じました。

昭和 22 年 (1947) 4 月某日、日本の引き揚げ船「信洋丸<sup>※10</sup>」がナホトカ港に入港しました。

「いよいよ乗船の時が来た！」

しかし、乗船できるのは 2,000 人程度でした。「信洋丸」の乗船能力は、6,000 人もあるのに、ソ連は乗船帰国を延ばしました。

その日は、私たちの熱望が通じたのか、真っ赤な朝日が昇り上天気で、祝福してくれたのを覚えています。

ようやく乗船できたが、その日 1 日は何故かみんな無口で、感無量とはこのことでしょうか。翌日からは、ぼちぼち我に返って戦友同士が故郷の話に華が

咲きました。

「今頃は、桜が満開で花見弁当はどんなにか」、花より食べる話になるのは、まだ、現実にもどっていません。

ただ、船内で見た新聞は読むことはできたのですが、紙面の内容を判断が出来なかったのはどうしてでしょうか。

帰りの玄界灘は、海が荒れて船酔いで苦しむ者が多くいたのですが、内地に向かっているのだと思うと、それも我慢できました。

1週間か10日かかりましたが、ようやく西舞鶴の港に着いたのは朝方だったと思います。

「万歳！」

甲板に出て見た真っ赤な朝日は、しっかりと目に焼き付いて何となく涙がこぼれたことは今も忘れません。

## 終わりに

戦争は大きな犠牲を払いました。

ここに改めて何千何万の亡くなられた戦友の冥福を祈ります。

岸壁には大勢の人が日の丸の小旗を振って迎えてくれました。

息子や夫の帰りを待ちわびる人たちが待ち受ける大棧橋を渡り、抱き合って泣いていました。

下船して集会所で新品の軍服と故郷に帰るまでの食料、乾パン3袋と300円を渡されました。

せめてもと、両親に土産と思い駅の売店でリンゴを少し買ったら手元にくらも残らないのには、横にいた戦友と顔を見合わせて驚きました。

解散後、舞鶴駅から復員列車に乗り込み、満員でギュウギュウ詰めで入口も一杯で窓から乗り込まなければ乗れない状態でしたが、ようやく我が故郷、大阪に着きましたが、我が家は戦災で焼かれ跡形もなく啞然と立ちすくみました。

たまたま近くの知人から両親は健在で疎開先の島根にいたことが分かりましたので、有り金をはたいて島根県浜田市へ行き両親と会いました。

いつ帰るかしのめない我が子を、戦死の公報の無いのを一縷の望みで待ちに待った甲斐があつてか、一瞬、呆然と目をみはり、痩せ細った息子と両親ともども大粒の涙を流して、抱き合って喜んだ感激は一生忘れません。

また、両親は、万一無事に帰ってくればと白米1俵をあの食糧不足の時にもかかわらず「息子が帰ってきたら食べさそう」と手も付けずに残してくれました。

白米とお頭付きの鯛の塩焼きは、生涯でこれほど美味しい食はありませんでした。戦後70年、恒久平和を守り続けた日本に感謝するとともに「しないさせ

ない戦争」をスローガンに命の大切さ、生きる喜びを私は生涯、肝に銘じ、これからも生きる限り、語り伝えていく決意です。

- .....
- (※1) **松花江**（しょうかこう） 中国東北地方を流れる川。源を長白山脈の白頭山に発し、ロシア連邦国境で黒竜江（アムール川）に注ぐ。長さ約 1,960 キロ。
  - (※2) **敵前上陸用鉄船**（てきぜんじょうりくようてつせん） 一般に「上陸用舟艇」と呼ばれるものは、大型揚陸艦に積載され、陸岸近くで進水し、接岸時に乗り上げて装備や兵員を揚陸するための艦艇である。大型は 50 トン、小型は 3.5 トンであるが、証言では 500 kg とあるから、ごく小さな舟艇。
  - (※3) **櫓**（ろかい） 船をうごかす「ろ」と「かい」。
  - (※4) **林口**（りんこう） 満州の林口。現在の林口県は中華人民共和国黒竜江省牡丹江市に位置する県。
  - (※5) **ウオロシロフ** ウラジオストックの北に位置する都市。ハロリー収容所、イリンスコエ収容所、アストラハンカ収容所が存在した。
  - (※6) **そこから貨車に乗車し** シベリア鉄道。満州のハルピンから、チチハル満州里を経てカリムスカヤに通じ、また牡丹江、綏芬河（スイフンガ）を経てウオロシロフを結び、更に牡丹江から虎林を経てイマンに通じていた。
  - (※7) **バツカン** 旧海軍で使われた飯を入れる容器（飯缶）
  - (※8) **コウリヤン** イネ科の一年草。穀粒を食用とするため、中国で広く栽培されている。高さ 3 メートルを超え、果実（穎果（えいか））は茎の先に穂状につく。アフリカ原産のモロコシがインドを経て 4 世紀以前に中国に伝わり、中国の風土に順応して多くの品種ができた。これらの品種群をコウリヤンとよんでいる
  - (※9) **ナホトカ** ウラジオストックの東方、ナホトカ湾に面する。極東地方における重要な港湾都市。
  - (※10) **信洋丸**（しんようまる） おもにナホトカと舞鶴の間を就航した引揚船。就航回数：17 回  
引揚乗船者総数：32,321 名



信洋丸模型（舞鶴市引揚記念館蔵）

## 国民学校時代

新湯 博久（しんゆ ひろひさ）

昭和10年（1935）3月 7日生まれ

男山笹谷在住

### 怖かった機銃掃射

父が鉄道員だった事もあり、住所が3年ごとに変わりました。

戦争が始まった頃は、園部国民学校1年生で、園部には空襲はありませんでしたが、戦争が激しくなってきたので、2年生のときに鳥取へ転居しました。

鳥取では、空襲に備えて、侵入してくる飛行機を迎え撃つため、久松山と言う山に高射砲<sup>\*1</sup>を備えるのに子どもまでも手伝わされました。

そこからまた、親が鳥取にも連隊があるので危ないのではないかと考えて、3年生で鳥取市から10キロぐらい郊外の親の実家のある吉岡温泉町に引っ越しました。吉岡温泉町のお寺では、大阪からの疎開児童がたくさん来ていました。

本当の飛行機を見たのは、グラマンの機銃掃射に遭った時。

学校で体操をしていたら、ラジオの中部軍情報で、グラマンが紀伊水道に入ってきたとの放送があったので、防空壕に逃げ込んだら機銃掃射です。怖かった。

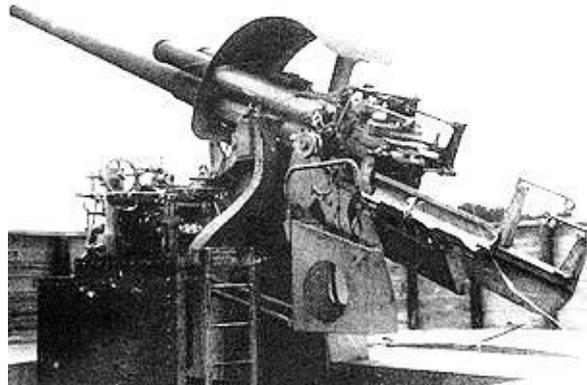
学校では、勉強はほとんどなく、空襲時の訓練で、目、鼻、耳を押さえないと爆風で目が飛び出し、耳の鼓膜が破れ、鼻は毒ガス吸うからと教えられました。

それから、近くにある溝の中に入り込みなさい。白いものを着るな、動くものがあつたら機銃掃射されるからと言われました。

また日本とアメリカの飛行機の見分け方では、日本の飛行機は低い音ですが、それに対しアメリカの飛行機は高い金属音などで見分けがつかしました。

### 大人と一緒に竹槍訓練

村の人と一緒に竹の先を斜めに切った竹槍を作るのです。それは墜落するア



三式 12cm 高射砲

アメリカの飛行機から落下傘で降下した搭乗員が逃げてくるから助けようとせず  
に竹槍で突き殺せということで、わら人形をたてて、大人と一緒に竹槍で突き  
刺す訓練をしました。

手旗信号の練習では、近くの山に兵隊さんが登って手旗信号をするのを見て  
分かった生徒は先生の所に行って答えるのです。答えられれば帰してもらえま  
す。それとモールス信号も覚えないと帰してもらえませんでした。

出征兵士を送る歌も覚えました。鳥取には、陸軍の連隊があり、歌を歌い旗  
を振って出征する兵隊さんを見送ったことがありました。

松根油<sup>※2</sup>と言って、松の根から油を採って飛行機の燃料にするため、松の根の  
採取にも駆り出されました。それと、中国にいる兵隊さんの食料にとドングリ  
を送るためドングリ拾いにも行きました。家にある鍋やヤカンなど金物もすべ  
て供出しました。

鳥取砂丘近くに鳥取飛行場があるのですが、そこで練習するためのグライダー  
を飛ばすためにゴムで引っ張るのですが、そのゴムをねじったロープをみん  
なで「ワッショイ！ワッショイ！」と引っ張って八の字型にグライダーをセッ  
トして飛ばす作業にも駆り出されました。

### 鳥取地震<sup>※3</sup>

昭和18年(1943)、鳥取市を中心に  
大きな地震がありました。鳥取市の3  
分の2は焼失し、沢山の犠牲者が出ま  
した。



鳥取地震の被災地（撮影地不詳）

戦時中のことだから火葬場なんかあ  
りませんので、市内を流れる大きな川  
内川があるのですが、その河原に穴を  
掘って犠牲者を入れ、ムシロをかぶせ  
て一斉に焼くのです。その煙は、私の  
住んでいる吉岡に流れてきて、臭くてご飯が食べられませんでした。

### 当時の食事

当時の食事は、父親の実家が旅館を経営していたので、湯治客の余り物を貰  
ったり、農家に行って芋の苗を採る。芋床のカスカスになった芋や芋のつるに  
カボチャを貰って、母はそれらを美味しく作ってくれました。

また、母は箆笥の引出しから着物を出して風呂敷に包んで農家へ持って行き、  
米と物々交換して食べさせてくれました。

美味しかったのは、カボチャのご飯、カボチャの中に米が少ししか入ってい

ませんでした。美味しかったです。それに満州大豆と言って、満州の大豆を圧縮して軽自動車の車輪ぐらいの大ききで、それを削ってご飯に入れて食べさせてもらいました。

戦争が終わって、アメリカ兵が来ると男は手に穴をあけられて針金を通して捕虜にし、労働者として連れて行かれるとか、女子はアメリカ兵に辱めを受けると言われ、怖くて自殺した人もいました。子ども心に恐怖心を抱いていました。

.....

- (※1) **高射砲**（こうしゃほう） 侵入する敵の航空機を迎撃するために作られた火砲。海軍では高角砲と呼ばれる。ここでは陸軍が米軍機の侵入に備えて各地に設置した高射砲を指す。
- (※2) **松根油**（しょうこんゆ） 松根（切り株）を掘り出して、それを乾溜（個体の有機物を加熱して分解すること）し、精製して得られた油状の液体。戦争末期の1944年から航空機燃料として利用が試みられ、全国規模の生産の組織化をはかったが、多大な労力を要し、収率も悪いため実用化には至らなかった。
- (※3) **鳥取地震**（とっとりじしん）昭和18年（1943年）9月10日、鳥取県東部で発生したマグニチュード7.2の地震。鳥取市を中心に大きな被害を及ぼし、1,000人を上回る死者を出した。こののち、昭和19年（1944）の東南海地震、昭和20年（1945）の三河地震、昭和21年（1946）の南海地震と死者・行方不明者が1,000人をこえる地震が続いた。

## 軍需工場

奥村みち子（おくむら みちこ）

大正 14 年（1925）7 月 24 日生まれ

川口東扇在住

昭和 12 年（1937）支那事変勃発当時は、現在の滋賀県近江八幡市の小学生でした。その頃は勝利、勝利で、昼は旗行列、夜は提灯行列で戦況はよかったです。段々、戦況が悪くなりました。

ラジオ放送では、「我が方損害なし」が多かったのですが、家にある金属類やお寺の鐘などすべて供出しなければならなくなった頃でしょうか「我が方損害軽微なり」に変わりました。

実際、損害があっても不利になることは言いませんでした。

昭和 16 年（1941）太平洋戦争勃発時、私は、支那（現在の中国）に加え、アメリカやイギリスと戦争をして大丈夫かなと子ども心に思っていました。戦況は、悪くなり、多くの男の人は兵隊として戦場に召集されました。

兵隊に行かれる方を、女性は国防婦人会<sup>\*1</sup>と言って、割烹着（エプロン）にタスキをかけた人たちが小旗を持って駅まで見送るのを、私も一緒になって見送りに行きました。

お国の為に尽くすということで、表だって言えないですが、送られるお母さんにとってみたら本心は、悲しかったことでしょう。

### 徴用令状が届き軍需工場へ

19 歳のある日、私は、農協に勤めていたのですが、滋賀県から徴用令状が届きました。

今の 19 才でしたら楽しい真っ盛りですが、軍事機密だったのか、滋賀県から 200 人程度でしたか、夜中に出発して、愛知県の豊川海軍工廠(こうしょう)<sup>\*2</sup>と言う軍需工場に強制的に連れて行かれました。

全員が寮に入り、1 部屋に 10 人ぐらいで、寝具は毛布 1 枚ずつで大変寒かったことを覚えています。

寮長は、軍隊式で厳しく、朝起きるときは、「起床 5 分前」の放送があるのですが、すぐに起きなければ、叱られるため毛布の中で支度（着替え）をしました。

工場では、大きな旋盤を使い、昼夜交代のフル回転で機関銃の弾丸を作って

いました。

弾丸に火薬を詰めるためドリルで穴をあけます。普通にあげると火花が散るので石鹼水を流しながら作業をするのですが石鹼水が顔にかかり、かぶれて腫れたことがあります。

この頃、よくアメリカの B29 が工場の上空を旋回して偵察するのを見ました。

昭和 19 年 (1944) の 6 月頃でしょうか、段々と爆撃が激しくなり、いよいよ工場が危ないと分かったのでしょうか。

工場疎開と言い、機械ごと大阪府泉南郡の吉見ノ里 (現在の田尻町) にある大阪機工という工場に私たちも疎開しましたが、そちらも岸和田市が近いため、空襲警報がある度、防空壕に避難するのですが、ふと防空壕から外を見ると街が炎上しているのが見えました。

## 寮での生活

寮での生活は、大豆の中に米が少し入っているような食事で、おかずは一品程度でした。食事当番の人が器に入れるのですが、食べるものがないと人間は賤しくなるものです。

19 才ですからお腹がすきます。少しでもたくさん入っている器を見つけ自分の箸を置いて確保するのです。そのような食事のあまり、時々お腹を壊してトイレで座り込んで仕事に帰ってこない人もいました。

工場周辺は、さつま芋が沢山とれるので、工場が風呂で芋を茹でたのを私たちが休日に買ってきて保存のため、芋を輪切りにして窓際に干して、干し芋にするのですが、お腹が減って待ちきれず生乾きのまま食べました。

部屋では、みんなが頭を並べて寝ているのですが、シラミ<sup>\*3</sup>が発生し頭は黒いシラミが付いて、新聞紙を広げ、くしで落として潰します。体には白いシラミがボタン穴に卵を産み付け、熱湯消毒もできず水でしか洗えないので完全に落ち切れずにいました。

昼夜交代制のフル操業のせいか、19 や 20 歳の女子が大きな旋盤を操作するので眠気のあまり、ドリルの操作を誤り、製品をオシャカ (不良品) にしてしまい、怒られはしませんでした。何時、爆撃にあつて死ぬのか分からない状態で働くのは辛かったです。

## 工場疎開で九死に一生

私は、工場疎開で爆撃には会いませんでしたが、同じ滋賀県から来た人で、工場疎開をしなかった人たちは爆撃で沢山亡くなられたそうです。

昭和 20 年 (1945) の終戦時の時は、石鹼水でかぶれたブヨブヨの顔を防空頭巾で隠して電車に乗り家に帰ってきましたが、難波の駅は焼け野原で、駅周辺

では焼け焦げた寝間着姿の人たちが無表情でぼーっと立っておられたのを、今でも思い出します。

.....

(※1) **国防婦人会** (こくぼうふじんかい) 正式名称は「大日本国防婦人会」、略して「国婦」。満州事変を機に、昭和7年(1932)、大阪の主婦たちによってつくられた。白エプロン(かっぽう着)・白タスキ姿で、出征兵士の送迎や国防献金などの活動を行った。軍部の支援を受けて、同年10月に全国組織となった。結成当時50万人の会員数は、昭和11年(1936)末に360万人、昭和16年(1941)には1,000万人弱に達したという。傷痍軍人や家族の援護を通じて、総力戦体制の担い手となったが、アジア・太平洋戦争の開始に伴う戦時体制の強化のため、昭和17年(1942)には競合関係にあった愛国婦人会などと合同して大日本婦人会となった。

(※2) **豊川海軍工廠** (とよかわかいぐんこうしょう) 工廠とは、軍隊直属の軍需工場のこと、武器・弾薬などの軍需品を開発・製造・修理・貯蔵・支給するための施設である。豊川海軍工廠は、昭和14年(1939)末、現在の愛知県豊川市地域に開廠され、機銃、弾丸の製造を行った。昭和20年(1945)初め頃から、近隣や長野県、静岡県へ工場を分散疎開して空襲に備えていたが、同年8月7日、100機以上のB-29による爆撃を受け工場は壊滅した。この空襲により、動員学徒452人を含む約2,500人が犠牲となった。



豊川海軍工廠の正門跡(平成20年撮影)。  
日本車輛製造豊川製作所の正門となっている。

(※3) **シラミ(アタマジラミ)** ヒトに寄生するシラミには、アタマジラミ、ケジラミ、コロモジラミの3種類があり、子供たちの間で集団発生するのはアタマジラミである。アタマジラミは、頭髪に寄生し、頭皮から吸血してかゆみや湿疹などを起こす。また、頭髪に点々と卵を固着させて産み付けるので比較的容易に発見できる。

## 終戦当時の思い出

東 龍一（ひがし りゅういち）

昭和 15 年（1940）3 月 19 日生まれ

川口西扇在住

私の戦争体験は、終戦当時 5 歳でした。

父の仕事の関係で岐阜県の神岡町（現在の飛騨市）の神通川上流の神岡鉱山（三井金属鉱山）※1 にいました。

鉱山では、社員が戦地に召集されているため、中国や朝鮮労働者のほかにアメリカ、オーストラリア、イギリス人捕虜が鉱山で働かされていました。

私の記憶に残っていることは、終戦 2 週間前の深夜（8 月 2 日午前 1 時ごろ）のことでした。

「起きなさい！」と、必死で起こす母の声。

驚いて外に出ると富山の方角の空が赤く染まり、子どもだった私は、空襲※2 のために、街が炎上していることなど何も判らずに綺麗だったことが、未だに鮮明に覚えています。

終戦後は、強制労働から解放された捕虜たちがトロッコに乗って帰国して行くのを覚えています。

.....

(※1) 神岡鉱山（かみおかこうざん）三井金属鉱業株式会社の 100%子会社で、岐阜県飛騨市（旧吉城郡神岡町）にあった亜鉛・鉛・銀鉱山。平成 13 年（2001）6 月に鉱石の採掘を中止した。

(※2) 富山大空襲（とやまだいくうしゅう）昭和 20 年（1945）8 月 1 日から 8 月 2 日にかけて、170 機をこえる B29 が富山県富山市に対して行った空襲。当時の市街地の 99.5%を焼失し、死者推定 3,000 人、負傷者同 8,000 人、被災者約 11 万人という大惨禍をもたらした。



昭和 20 年（1945）8 月 1 日に日本全国の都市に投下されたアメリカ軍による空襲予告の伝単（ビラ）。左下 3 番目に「富山」の文字が書かれている。

## 戦後の生活

岡本トシエ

大正 12 年（1923）1 月 1 日生まれ

美濃山在住

昭和 16 年（1941）太平洋戦争が始まった頃は、18 歳ぐらいでしたが、私が長女で 13 歳違う弟がいます。私は戦争の経験は、全然ありません。

昭和 23 年（1948）に結婚しましたので、亡くなった主人から聞いていたのは、大正 6 年（1917）生まれで 18 歳の時に志願し入隊し、広島の呉にいたということでした。

その後、海軍の軍艦に乗っていたのですが、戦争が激しくなり、戦争が終わる頃には予科練で飛行教官をしていました。奈良の天理教の建物を接収して、訓練生を教えていましたが、終戦の一週間後に引き揚げてきました。

夫は、前の奥さんとの間に子供が 1 人おり、前の奥さんは学校の先生をされていました。予科練の仕事は午後 4 時には終わり、帰宅して、子どもにオルガンを弾いたりして母親がわりをしていました。

兵隊での贅沢な暮らしが身につけているので、報酬は貰っただけ使い、翌月になったら次に貰えると言って、あるだけ使っていたので、無一文で帰ってきました。

### 美濃山での生活

終戦になって、2 人目の子どもでき、本家で半年ばかり厄介になっており、その後、二間の小さな家を建ててもらいました。

美濃山は、若い人たちが兵隊で行かれたので田畑を耕す者がいない、荒れ放題の田畑を借りて、鍬ひとつで開墾しました。

戦後の食糧難で生活が辛いのと、本家の厄介者であったので、たびたび子どもを連れて奥さんの実家である綾部の親元へ行っていました。

そうこうするうちに、離婚になってしまいました。

奥さんは、夫が兵隊から帰ってきて明るる年の 2 月ごろに子ども一人と親元へ帰りました。

## 夜間はまっくら

私が結婚する前の実家は、八幡の志水<sup>しみず</sup>でしたが、美濃山は街灯もなく、竹藪も放ったままでした。電気は通っていましたが、夜になっても1軒に1つの灯りぐらいで2灯の家はありませんでした。

電話も区長さんの家に公衆電話が1台で、借りることはできましたが電話口に呼び出すようなことはできませんでした。

夜になっても暗くてラジオ一つなく、戸を閉めると、人が住んでいるかどうか分からないような有様でした。今でこそ電球でも60ワットや100ワットですが、その時分は10ワットか、よくても20ワットぐらいでした。

私は、体が丈夫でなく、実家から農業はできないだろうと和裁を仕込まれていました。美濃山へ来て、半年ほど、京都の室町の仕事をしていました。

八幡の駅から「飛脚」というのがあるので、仕立てた物は、「飛脚」が運んでくれました。当時の自転車は一家に1台あるかないかの時代でした。

仕立てた着物は、たとう紙<sup>※1</sup>で包んで持っていきました。

仕立てた着物を納めるときは、夫の自転車に乗せてもらい、八幡の駅まで行きます。持って帰るときは反物ですから背中に背負って持って帰っていました。

たとう紙が古い、しわがあるなどでお客さんから苦情がでて、この仕事を辞めることになり、実家の親は惜しいと言っていました。夫一人でできない農業を手伝うことになりました。

私は、食べ物を食べると、着る物を着ると、物すごく苦勞してきました。鋏一つない何にもないところから、結婚生活がはじまりました。

結婚するまでは、両親とともに13歳離れた弟と貧乏ながら不自由無く暮らしていましたが、結婚後は朝も夜も働けるだけ働きました。

印象に残っている事は、大阪空襲では、煙で昼間でも暗かったことを覚えています。

.....

(※1) 畳紙 (たとうがみ)、帖紙 (たとうがみ) 結髪の道具や衣類などを包むための紙である。単にたとう、タトウなどとも呼ばれる。着物などを包む畳紙は、厚手の和紙に渋や漆などを塗り折り目をつけたもので、三つ折にした後にその端を折り曲げることで中のものが落ちないようにする。

## 戦時中の生活

匿名

南ヶ丘老人の家に来館されていた方々

私たちは、戦争が始まった頃、国民学校 2 年か 3 年生でした、学校での生活は、授業はほとんどなく木津川まで行き、草を刈り、耕し、大豆などを植えていました。

運動場では、今から思えば、ばかばかしいことですが、アメリカ兵が来たら竹やりで突くと言って訓練されていました。

家の庭には、10 人ほどは入れる防空壕があり、壕の中は水が湧いてきて敷いであるムシロ<sup>※1</sup>が濡れて気持ち悪かったのですが、皆が集まるので子ども心に楽しかったです。

食べ物は、配給制で配給された小麦粉かトウモロコシの粉を加工して蒸しパンを作って粉の代わりにもらっていましたが、それが砂糖も無いのに、ほんのり甘くて美味しかった。

またタニシやイナゴ、蟹、ザリガニ、竹で編んだドジョウかごで取ったドジョウ、食べられるものは何でも食べました。

今こそ、贅沢になって食べ物を捨てていますが、釜に残ったご飯を水で洗ってザルにあげ、日向に乾して糰（ほししい）にしてお米一粒でも大切にしていました。

2、3 か月に 1 回ぐらいでしたか、近所の人たちが砂糖や小豆、小麦粉を買って持ち寄り、ホラガイ<sup>※2</sup>（麦饅頭）を作り、作ったホラガイを皆で按分して分け合っていました。

大道（今の南ヶ丘浴場の前の道）でタニシを取りに行った所に、アメリカの艦載機が飛んできてババババーンと機銃掃射を受けて怖い思いをしたこともあります。

今のイズミヤ（八幡一ノ坪）の付近に爆弾が落とされ、皆で見に行くと大きなすり鉢状の穴があいていました。

大阪の空襲では、空が灰色で、朝 10 時になっても煙で夜が明けなかったことを覚えています。

終戦直後ですか、衛生状態が悪かったので、シラミの駆除のため、頭から白い殺虫剤（DDT）を吹き付けてもらって、頭が真っ白になりました。

また、体の寄生虫を出すため、運動場にコップを持って 2 列に並び、その真

ん中を先生がマクリ※3と言う虫下しの入ったバケツを持って、柄杓(ひしゃく)で入れてもらって、嫌がって飲んだことがあります。

## 心は豊か

最後に、もう戦争は、あつてはならないことです。戦時中のことを思ったら今は、極楽で贅沢です。当時は、みんな協力して互いに助け合いながら生活していました。人と人の繋がりが希薄になったいま、人間的には、昔の方が豊かだったと思います。

.....

(※1) **ムシロ** わらやいぐさなどの草で編んだ簡素な敷物

(※2) **ホラガイ** 麦饅頭のこと。形がホラ貝に似ていること地元で呼ばれている。

(※3) **マクリ** 紅藻類イギス目フジマツモ科の海藻。漸深帯の岩上に円盤状の仮根で着生する。黒紫色、高さ5~15cm、円柱状の主軸は数回叉状に分枝し、各枝の上に細かな枝が密生している。乾燥すると黄褐色になるが、これを甘草とともに湯で浸出液をつくり、回虫の駆除薬として使用。

## 戦争の推移と民衆の生活

監修：京都府立大学・小林啓治

### 戦争の始まりと拡大

「先の戦争」という言葉がある。その際の「戦争」とは一体いつ始まり、誰を相手にした戦争だったのか、果たして共通認識があるだろうか。おそらく誰もが了解しているのは、アメリカとの戦争だったことであろう。イギリスも含めて理解している人も少なくないだろう。

戦争は、ポツダム宣言を受諾することで終結したが、この宣言の署名国には、アメリカ、イギリスのほかにも中国が入っていることを無視してはならない。昭和12年（1937）7月7日に開始された日中戦争なくして対米英開戦はありえなかったのである。では、日中戦争はなぜ起こったのか。直接の発端は、昭和6年（1931）9月18日に始まった満洲事変にある。

この日、関東軍（日本の満州駐屯軍）が南満州鉄道を爆破し、それを中国軍のしわざであるとして満州の大半を占領してしまったのが満洲事変である。昭和7年（1932）3月、日本はそこに「満州国」を樹立し、この傀儡（かいらい）国家を通じて満洲を実質的に支配した。当時の国民は満洲事変を熱狂的に支持したが、それが関東軍の謀略事件であることは知らなかった。

一方、中国は当初から日本の侵略を国際連盟に訴えていた。日本側の期待に反して、国際連盟は満州に派遣された調査団の報告に基づき、日本の行為を自衛と認めず、「満州国」を容認しなかった。そのため、昭和8年（1933）3月、日本は国際連盟に脱退を通告した。

その2ヵ月後、日中間にはいったん停戦協定が結ばれるが、日本軍は華北も分離しようとして策動した。その結果、北京郊外の盧溝橋（ろこうきょう）でおこった日中両軍の衝突をきっかけに、昭和12年（1937）に日中戦争が開始された。日本政府は一撃で中国を屈服させることをねらったが、中国側は国民党と共産党が協力して抗戦態勢をとり、日本は全面戦争を強いられた。さらに戦争は長期化し、大量の軍隊を派遣しても容易に決着がつかない泥沼の戦争となった。

米・英は中国を南方から支援していたので、日本はそれを遮断し、資源を獲得するために南方へ矛先を向け、その結果、英米の強い反対に直面する。アメリカとの交渉は中国からの日本軍の撤兵が焦点となるが、日本はそれに応じず、交渉は決裂した。その意味で、日中戦争は昭和16年（1941）12月8日のマレー半島上陸、真珠湾攻撃によって始まる新たな戦争と切り離すことはできない。

これに加えて、日本軍が侵略した地域は中国を含む東アジア、南太平洋の全域にわたっていたことを忘れるべきではない。日本軍がそれらの広範な地域で戦死者・餓死者を出し、戦争に巻き込まれた現地の、膨大な人々の命が奪われたことが、戦争の特質を雄弁に物語っている。この実態を呼称においても表現すべく、歴史学ではアジア・太平洋戦争という言葉が広く用いられている（たとえば、岩波書店が刊行した『講座アジア・太平洋戦争』全8巻、2005～6年）。

## 兵士の動員

満洲事変において内地の師団で動員に関わったのは7個師団であり（当時の師団数17）。しかもそれらの一部が派遣されたにすぎない。したがって、軍事動員という観点から見れば、満洲事変はかなり限定的な戦争であった。しかし、これを契機に、大正デモクラシー期に低下していた軍部の地位が高まり、社会の中で軍事的価値観が優位になった。出征兵士をかつぼう着で見送った国防婦人会が、満洲事変期の大阪で組織され、軍部の支持を受けて全国に広がっていくことは、そうした事態を象徴している。

昭和12年（1937）の日中戦争は、兵士の動員という点で大きな画期となった。戦争が始まると、一挙に大動員が実施された。全国の市役所や町村役場から、いまだかつてない規模で赤紙（臨時召集令状）が配達された。兵営にいる現役兵だけでは足りないので、現役を終わり地域で生活している在郷軍人が兵営に呼び出され、戦地に投入されることになったのである。この段階ですでに、現役が終わって10年以上たった30代も召集されている。召集できる年齢から、まんべんなく動員したようである。昭和13年（1938）10月の時点で、内地には近衛師団を残すだけとなり、以後は、次々とあらたな師団が編成されていった。ちなみに、現在の八幡市は戦前は綴喜郡に属し、綴喜郡は京都連隊区の管轄下にあったから、応召者（赤紙によって召集された在郷軍人）は、歩兵の場合は京都連隊（伏見にあった第9連隊）へ、その他の兵種も伏見の兵営に行くことになる。

次に大きな動員があるのは、昭和16年（1941）後半期で、もちろん対米英開戦を想定してのことである。そして戦争末期の昭和20年（1945）には、本土決戦を前提とした大規模な動員が行われた。本記録集にはみられないが、応召（赤紙によって召集されること）は一回だけとは限らない。たとえば日中戦争開始時に応召し、いったん帰還したあと、アジア・太平洋戦争の開始とともに2度目の召集があり、また帰還して本土決戦に備えて召集されるといった事例もある。3度の応召は数としては少ないが、2度応召したという事例はかなりの割合で存在する。

召集によらない兵士の動員もある。志願兵の制度がそれである。海軍は志願兵

制度を採用しており、一部を除き 17 歳以上～21 歳未満の志願者が試験を受けて採否がきまる（予科練については匿名体験談参照）。陸軍にも志願兵制度があった。陸軍の場合は、17 歳から 20 歳未満で志願すれば現役兵になることが可能だった。

兵士が出征する際には、地域をあげて見送りが行われたことは、映画やドラマでよく目にするところである。これと同様に、戦死者の遺骨が帰還する場合も、町や村ぐるみで駅頭などに迎えに行くことになっていた。戦死者の葬儀は、行政の単位である町や村が責任をもって公葬という形で実施された。町葬ないし村葬といわれるのがそれである（田制体験談参照）。行政の長や幹部はもちろん、地域の各種団体長がこぞって参加し、小学校（国民学校）の生徒も、特定の学年が参加した。地域全体で戦死者を弔うという形式が重視されたのである。

### 国民生活の変化

兵士の動員が大規模になると、軍事援護と呼ばれる活動に取り組まなければならなかった。応召していった兵士は、一家を支える大黒柱であり、彼らが出征するとたちまち生活難に落ち込む家庭が少なくなかった。戦死した場合にはなおさらである。そうした家庭を精神的に、あるいは経済的に支援するのが軍事援護である。慰問袋を作って戦地に送ることもその一環であった。こうした軍事援護を組織的に行うために、昭和 14 年（1939）には全国の市町村で銃後奉公会という組織が作られた。

動員されたのは兵士ばかりではない。昭和 13 年（1938）に制定された国家総動員法に基づいて、翌年には国民徴用令が公布され、国民を軍需工場などに動員できるようになった。奥村体験談はそのようすを具体的に証言している。八幡では、昭和 16 年（1941）から 19 年（1944）までに、153 人が舞鶴海軍施設部などに徴用されている（『八幡市誌』第 3 巻 291 頁）。また、昭和 18 年（1943）以降、労働力不足に対処するために、中等学校以上の学生が軍需産業や食料生産に動員された。

国民をくまなく動員する総力戦体制を支える末端組織として、昭和 15 年（1940）、部落会・町内会の下に 10 戸で構成される隣組が整備された。隣組は定期的に常会を開き、政府方針の伝達、配給、公債の消化、貯蓄、防空・防火などの実行単位となった。国策を国民に徹底させ経済統制をやりやすくすることがねらいであった。人々の生活に戦争の影響が顕著に現れてくるのは、日中戦争が全面戦争となり長期化を余儀なくされてからである。日中戦争が本格化して以降、民需生産は次第に切り捨てられ、資金や労働力は重化学工業に投入された。昭和 12 年（1937）を 100 とした場合の生産指数は、昭和 16 年（1941）には食料品が約 78、繊維が約 60 に低下している。

こうした中で、生活必需物資の配給制が実施されていった。昭和 15（1940）

年、砂糖・マッチの切符制が始まり、翌年には米が配給制となった。さらに、昭和 17 年（1942）には、衣料品の切符制が実施され、日用品のほとんどが統制配給の対象となった（八木、川村体験談参照）。統制配給は、各世帯に人数に応じた切符をあらかじめ交付しておき、それと引き換えに物資を渡すといった方式が代表的で、これを切符配給制（切符制度による配給）といった。とはいえ、計画的な配給は年を追うごとに困難となり、昭和 19 年（1944）11 月以降、主要都市への空襲が本格化すると、食糧の配給状況は悪化の一途をたどるようになった（匿名者体験談参照）。

金属の供出も日常生活に大きな影響を与えた。法令に基づく本格的な供出は昭和 16 年（1941）から開始され、官公署はもちろん、国民学校の二宮金次郎像、寺院の梵鐘、家庭の鍋釜・仏具にいたるまで根こそぎ回収へとエスカレートした。

### 空襲と集団疎開

アメリカ軍の日本に対する空襲は、昭和 19 年（1944）11 月から開始される。日本空襲を担ったのは B29 という当時最新の爆撃機である。この年の 7 月から 8 月にかけて、マリアナ諸島の日本軍が次々に全滅し、同地域はアメリカ軍の手に落ちた。これによって、本土のほぼ全域が B29 の行動半径内に入るようになった。数ヵ月かけて B29 の出撃基地は整備され、日本空襲が開始されたのである。

日本空襲はおおまかに 3 期に区分される。第 1 期は、昭和 19 年（1944）11 月下旬～昭和 20 年（1945）3 月初旬までで、高性能爆弾によって軍需工場、航空機工場などが爆撃された。第 2 期は 3 月中旬～6 月半ばまでで、大都市市街地に対して焼夷弾による爆撃が行われた。第 3 期は 6 月後半以降で、中小都市市街地に対して焼夷弾が投下された。本誌では、大阪空襲や堺空襲などの状況が具体的に語られ（田制・八木・増田・高井体験談参照）、グラマン戦闘機などによる機銃掃射の体験も寄せられている（西川・新湯・高井・増田体験談参照）。

空襲の危険が迫るにしたがって、東京・大阪では昭和 19 年（1944）8 月から学童疎開が始まった。それ以前から、親戚などの縁故がある子供は疎開を始めていたが（増田体験談参照）、そうした縁故を持たない子供たちは、学校ごとに集団で疎開先へと移動していった。八幡の疎開については『八幡市誌』に記述があるが、高井体験談はそれを補う貴重な記録である。親元から離れて疎開した子供たちは、戦争が終わったからといって直ちに帰宅できたわけではなく、長い場合は数ヵ月して帰宅しても住む家のない場合や、親が空襲で犠牲となった事例もあった。空襲で焼け野原となった大都市はもちろん、いずこも食糧難で、庶民は戦時中以上の苦しみを味わわなければならなかった（岡本体験談参

照)。

### 敗戦・引揚・シベリア抑留

昭和 20 年 (1945) 8 月 15 日、日本の敗戦として語られるこの日は、日本軍が占領した地域や植民地においては解放の日であった。この日を境に、戦地・植民地にいた日本軍や日本人 (民間人) の運命は一挙に暗転する。ポツダム宣言は日本の主権が及ぶ地域を、本州・北海道・九州・四国ならびに連合国が決定する諸小島に局限した。敗戦直後、それ以外の地域にいる一般の日本人は 300 万人以上、日本軍将兵および軍属は 350 万人をこえていた。

一般日本人が帰ってくることを引き揚げといい、その事業は 4 年間でほぼ終了をむかえた。本誌では、前川体験談が植民地で育った日本人の姿を詳しく伝えている。注意しなければならないのは、逆の場合、すなわち戦前の「内地」にいた中国人 (台湾を含む) や朝鮮人がどうなったのか、という問題である。この点について、神岡鉦山で働かされていた中国人、朝鮮人、米・濠・英の捕虜たちについてふれたのが東体験談である。それとともに、帰還しなかった (できなかった) 多くの朝鮮人がいたこと、あるいは中国人に預けられた日本人の子供たちがいたことにも留意しなければならない。

一方、軍人・軍属の復員は、ソ連地域を除いておおむね昭和 23 年 (1948) 初めまでに完了した。ソ連によってシベリアに抑留された日本人捕虜は、強制労働に酷使され (渡邊体験談参照)、全体で約 60 万人 (人数については諸説がある) の約 1 割が死亡したとされている。帰国事業は昭和 31 年 (1956) まで行われているので、渡邊實さんが昭和 22 年 (1947) に帰国したというのは、比較的早い事例といえる。

本記録集の体験談は数こそ少ないものの、さまざまな事例がまとめられており、戦争を多角的に考えていく上でとても貴重な証言である

## 戦争体験談監修にあたって

名城大学非常勤講師 久野 潤

この度の八幡市における戦争経験者の証言集の出版をお慶び申し上げます。

古来国家鎮護の社として崇敬された石清水八幡宮は、国難に際して度々天皇の行幸や上皇の御幸があり、また武家からも武神として篤く信仰されました。まさにその石清水八幡宮を要する八幡の地で、戦後 70 年を過ぎ改めて戦争を問い直す貴重な機会となりましょう。

建国以来、我が国が平和であった時期というのも「何もなかった」から平和であったわけでは決してありません。いついかなる時代においても、常に最善を尽くして命がけで国をまもってきてくれた先人たちがいたのです。そして現在の平和は、そうした無数の先人の努力と尊い犠牲のうえに成り立っていることを忘れてはなりません。

戦争経験者は、目下みな高齢で御存命の方が少なく、その証言は貴重なものです。のみならず、戦後における特定の思想風潮の中で実際の経験についてすら語ることが憚られてきた、また最近では、若者層の無関心ゆえ伝わらずにいたことも少なくありません。私自身、この 5 年間で実際に戦地に行かれた方を中心に 350 名ほどの戦争経験者を取材してきましたが、戦後 70 年経って初めて口を開いたという方も少なからずいらっしゃいました。この証言集が多くの方にとって、自分たちの直接の先輩が命を懸けて戦った戦争に興味をもち、また残り少ない時間で戦争経験者の話を自身で聞く努力をするきっかけとなることを願ってやみません。

# 參考資料

## ポツダム宣言（現代語訳）

- 1、我々合衆国大統領、中華民国政府主席、及び英国総理大臣は、我々の数億の国民を代表し協議の上、日本国に対し戦争を終結する機会を与えることで一致した。
- 2、3か国の軍隊は増強を受け、日本に最後の打撃を加える用意を既に整えた。この軍事力は、日本国の抵抗が止まるまで、同国に対する戦争を遂行する一切の連合国の決意により支持され且つ鼓舞される。
- 3、世界の自由な人民に支持されたこの軍事力行使は、ナチス・ドイツに対して適用された場合にドイツとドイツ軍に完全に破壊をもたらしたことが示すように、日本と日本軍が完全に壊滅することを意味する。
- 4、日本が、無分別な打算により自国を滅亡の淵に追い詰めた軍国主義者の指導を引き続き受けるか、それとも理性の道を歩むのかを選ぶべき時が到来したのだ。
- 5、我々の条件は以下の条文で示すとおりであり、これについては譲歩せず、我々がここから外れることも又ない。執行の遅れは認めない。
- 6、日本国民を欺いて世界征服に乗り出す過ちを犯せた勢力を永久に除去する。無責任な軍国主義が世界から駆逐されるまでは、平和と安全と正義の新秩序も現れ得ないからである。
- 7、第6条の新秩序が確立され、戦争能力が失われたことが確認される時までには、我々の指示する基本的目的の達成を確保するため、日本国領域内の諸地点は占領されるべきものとする。
- 8、カイロ宣言の条項は履行されるべきであり、又日本国の主権は本州、北海道、九州及び四国ならびに我々の決定する諸小島に限られなければならない。
- 9、日本軍は武装解除された後、各自の家庭に帰り平和・生産的に生活出来る機会を与えられる。
- 10、我々の意志は日本人を民族として奴隷化した日本国民を滅亡させようとするものではないが、日本における捕虜虐待を含む一切の戦争犯罪人は処罰されるべきである。日本政府は日本国国民における民主主義的傾向の復活を強化し、これを妨げるあらゆる障碍は排除されるべきであり、言論、宗教及び思想の自由並びに基本的人権の尊重は確立されるべきである。
- 11、日本は経済復興し、課された賠償の義務を履行するための生産手段、戦争と再軍備に関わらないものが保有できる。また将来的には国際貿易に復帰が許可される。
- 12、日本国国民が自由に表明した意志による平和的傾向の責任ある政府の樹立

を求める。この項目並びにすでに記載した条件が達成された場合に占領軍は撤退すべきである。

- 13、我々は日本政府が全日本軍の即時無条件降伏を宣言し、またその行動について日本政府が十分に保障することを求める。これ以外選択肢は迅速且つ完全なる壊滅があるのみである。

## 戦争関連年表

元号	西暦	主な出来事	八幡市・体験者の出来事
昭和 6	1931	9/18 柳条湖事件から「満洲事変」はじまる	
昭和 7	1932	「満州国」建国、リットン調査団 5.15事件 犬養首相暗殺	
昭和 8	1933	3月 国際連盟脱退 8月 関東軍特種演習	
昭和 9	1934	東北で冷害	・ 9/21 室戸台風で八幡・有智郷尋常小学校倒壊、教員・生徒に多数の死者
昭和 10	1935	天皇機関説事件 青年学校令施行	・ 9/1 八幡町実業青年学校創立
昭和 11	1936	2.26事件 11月 日独防共協定	・ 8/12 八幡町立家庭女学校を青年学校とする
昭和 12	1937	7/7 盧溝橋事件から日中全面戦争へ（諸説あり）	・ 宇治・枚方火薬庫爆発
昭和 13	1938	4月 国家総動員法成立（戦時体制の強化） 6月 「燈火管制」規則により、屋外灯が制限される	・ 4/8 八幡幼稚園開園
昭和 14	1939	5月 ノモンハン事件 7月 国民徴用令 独ソ不可侵条約 ドイツがポーランド侵攻（第二次世界大戦開始）	
昭和 15	1940	日独伊三国軍事同盟	
昭和 16	1941	4月 「国民学校令」が公布（3・1）され、尋常小学校が国民学校となる。 4月 日ソ中立条約締結 12月 太平洋戦争、開戦（マレー半島上陸、ハワイ真珠湾を攻撃）	
昭和 17	1942	2月 衣料・みそ・しょうゆの切符制が実施 4月 ドゥーリットル空襲（日本初空襲） 6月 ミッドウェー海戦	
昭和 18	1943	2月 ガダルカナル島撤退 4月 山本五十六戦死 9/10 鳥取大地震 10月 学徒出陣 東京都制施行	・ 田制さん八幡へ ・ 新湯さん鳥取地震に遭遇
昭和 19	1944	4月 学徒勤労働員の通年動員が始まる 6月 マリアナ沖海戦敗北。	・ 男山ケーブル廃止 ・ 奥村さん、滋賀県から徴用令状が届き、愛知県の豊川海軍工廠へ

昭和 19	1944	米軍サイパン島上陸 8月 学童集団疎開、始まる 11/24マリアナ諸島からB29初空襲 12月 歩兵第9連隊(藤森駐屯)は、 フィリピンのレイテ島で米軍との 戦闘により消滅	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 渡邊さん、召集され満州へ</li> <li>・ 田制さん、義弟がフィリピンへ出征</li> </ul>
昭和 20	1945	1/16、3/19、4/16、5/11、6/26 京 都空襲 2月 硫黄島上陸 3/10 東京大空襲 3/12名古屋大空 襲 3/13-8/10 堺空襲(5回) 3/14-8/14 大阪大空襲(8回) 3/16神戸空襲 4月 沖縄戦開始 5月 ドイツ降伏 6月 沖縄戦終結 7月 ポツダム宣言 8/1-8/2 富山大空襲 8/6 広島原爆投下 8/9 長崎原爆 投下 8/9ソ連対日参戦 8/15 終戦の詔勅 GHQによる占領 五大改革指令 連合軍、京都市に第6軍司令部を置 く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4月～7月 京都市内から都々城 村へ学童疎開</li> <li>・ 2/27 田制さんの義弟がフィリピン マスバテ島で戦死</li> <li>・ 大阪大空襲で八幡の空に煙が流れ 込み、昼間でも暗くなる</li> <li>・ 八木さん、増田さん大阪大空襲に 遭遇</li> <li>・ 5/11 戸津の麦畑に爆弾落ちる(被 害なし)</li> <li>・ 6/26 西川さん、伏見の連隊に入 隊。7月に淡路島へ</li> <li>・ 東さん、富山大空襲を見る</li> <li>・ 10/26 西川さん帰還</li> </ul>
昭和 21	1946	「天皇の人間宣言」 戦後初の衆議院選挙 公職追放 新 円切替 11/3 日本国憲法、公布	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 配給が良く滞る 白米 1 升 70 円、小麦 1 升 65 円、 給料月 760 円</li> <li>・ 青年団・太鼓まつり再開</li> </ul>
昭和 22	1947	南北朝鮮分断 日本国憲法施行、 教育基本法制定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 渡邊さん、シベリアから帰還</li> </ul>
昭和 24	1949	中華人民共和国、建国	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 米軍将校リッチ、八幡町へ供米督 促に来る</li> </ul>
昭和 25	1950	警察予備隊、発足	
昭和 26	1951	サンフランシスコ講和条約、締結	
昭和 27	1952	サンフランシスコ講和条約、発効 日米安全保障条約、発効	

### <八幡市の応召者>

昭和 20 年（1945）1 月現在

	人口	応召人員	人口比
八幡町	9,525 人	406 人	4.3%
都々城村	2,159 人	52 人	2.4%
有智郷村	1,892 人	101 人	5.3%

京都府庁文書より

- ・開戦直後の半年間は、応召軍人の家族に対して、出征軍人後援会による基金募集等で月々 12～13 円を生活金扶助。応召軍人農家の乳幼児を農繁期に預かる臨時の託児所を開設。
- ・戦局の拡大により昭和 13 年（1938）10 月募集で中止となる。遺家族への扶助は役場のみとなる。

### <軍需工場への徴工>

- ・昭和 15 年（1940）1 人、16 年（1941）は 8 月までに 7 人、17 年（1942）30 人、18 年（1943）53 人、19 年（1944）61 人

徴用先→舞鶴海軍施設部が主で土工が 80%を占めていた。

### <供出米割当額>

単位：石

	昭和18年	昭和19年	昭和20年	昭和21年	昭和22年	昭和23年	昭和24年	昭和25年
供出 割当	6,991.68	6,301.00	5,549.00	5,834.40	6,350.00	6,228.98	5,256.00	4,684.00

(1 石 = 180.39 リットル)

### <京都空襲>

京都空襲（きょうとくうしゅう、Bombing of Kyoto）は、アメリカ軍によって太平洋戦争中の1945年（昭和20年）の1月16日から6月26日かけて5度にわたって行われた無差別爆撃。

- ・ 第1回 1月16日 23時23分頃、馬町空襲（東山区馬町）死者36名（一説に40名以上）、被災家屋140戸以上。
- ・ 第2回 3月19日、春日町空襲（右京区）
- ・ 第3回 4月16日、太秦空襲（右京区）死者2人、重傷者11人、軽傷者37人、民家半壊3戸。
- ・ 第4回 5月11日、京都御所空襲（上京区）
- ・ 第5回 6月26日早朝、西陣空襲（上京区出水）死者50人、重軽傷者66人、被害家屋292戸、罹災者850名。（wikipedia から出典）



## 八幡市戦争体験談記録集

平成 28 年(2016 年)9 月

発行 八幡市 市民部 人権啓発課

監修 小林啓治・久野潤

住所 〒614-8073 八幡市八幡軸 6 3 番地 八幡人権・交流センター

電話 075-981-3127 (直通) FAX 075-983-4545